

四谷

四谷 四谷 門の外より西の方内藤新宿のあり 連の惣名之里

老云此地の四方は谷あり故は四谷と号する 南向亭云く青野町

地小谷有しが寛永十三年外廓營造の時序堀の揚土を以て東西の両谷を埋め

坂也又古へ坂あり有りし頃ハ民家一軒ありて夫婦の入口を今も坂

或人云此入國の頃ハ今の荒町兩側番町永田町に至る本多弥八郎高木九助兩家

の下屋敷とて下し置れし共隣城近きにより市谷の臺此原を永代の

御説少く下しゆへ表四百八十間は只四人指置られしあり四家と云り

此地ハ永祿の頃霞村とよみくると云傳ふ或云往古此地ハ武蔵

野は續けし曠原あり此所彼所ハ土民の家四家ありし故

四家と云へり共の事跡合券は往古今の尾州公の屋敷表門の地及

高井戸の方より四ツ家と稱し往來はやせしありとあり

牛頭天王社 同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入る

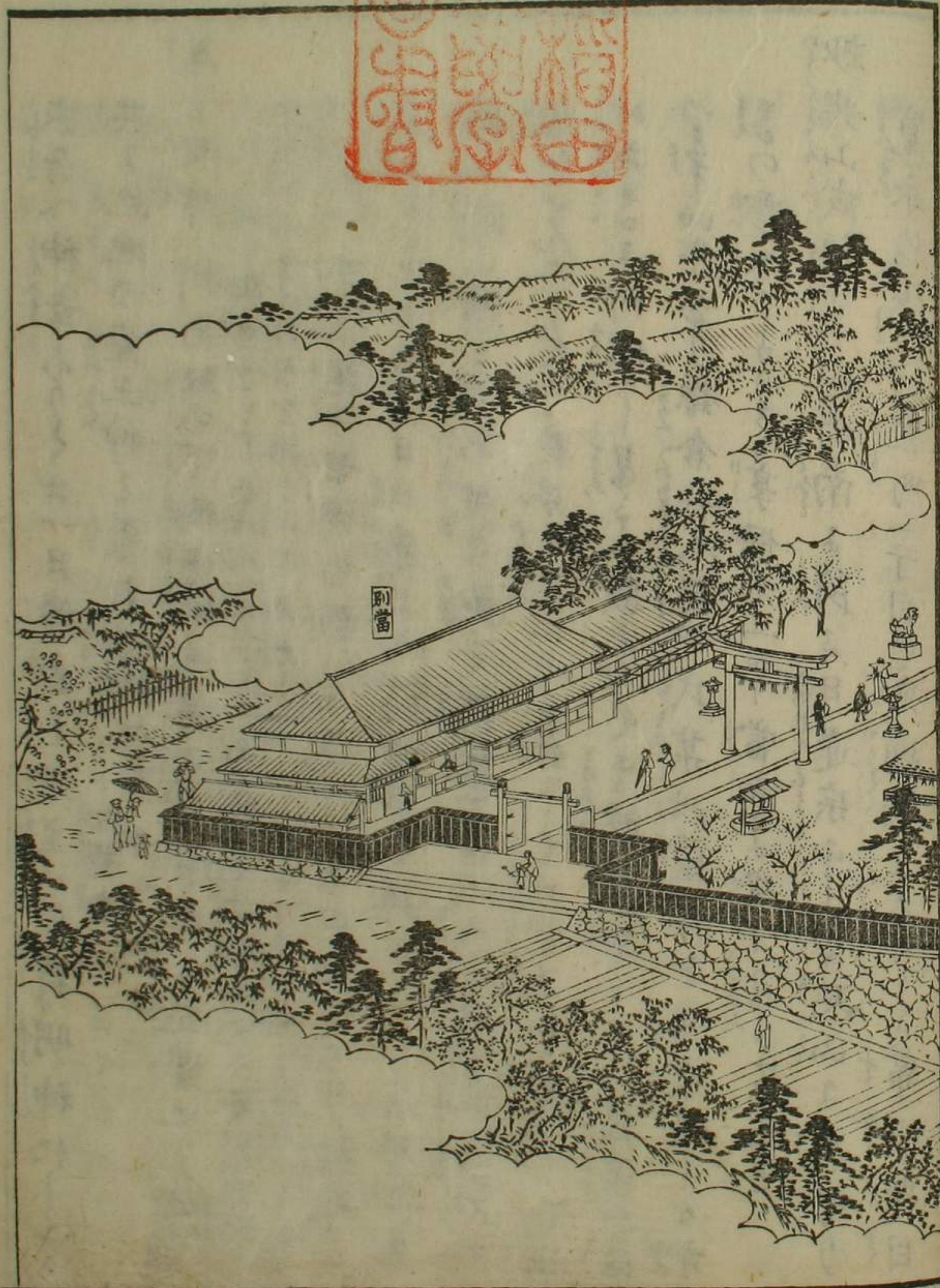
二丁斗を西より 故は俗字して此小 祭神素盞鳴尊 本地佛ハ藥師

本は四谷の人家開けし 路を天王横町といふ 祭神素盞鳴尊 弘法作紫の一

号を 寶仙宗野 祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町 傳馬町二丁目の

の横町を云





社王天頭牛之谷々四々



旅所へ神幸ありて廿一日帰興を地主ハ稻荷明神に
共ニ此地の産土神と崇む本地ハ十一面觀音

鬼子母神 同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺ニ安置せり當寺日

水谷ニ在テ乘蓮寺ト号セ此地ヘ移レテ後藤堂大學頭高次の室高見院心
月明宗大姉の法号を採ク山を高魁ト号シ寺を日宗ト唱ヘ其家より寺院
再興アリ本宮鬼子母神の像ハ日法上人の彫像ナリ相傳ふ

文永元年十月三日日蓮上人四十母君を拜せん一旧里安房

國小湊ニ歸る母君悦の餘ヲ頓死モ上人大歎テ生活ヲ祈

念をせん一先徒弟日法上人ニ命シテ此本宮を造ル一依

此本宮一祈願一嘗ニ小驗ありクモ一晚蕪生一ハ一後壽を保

つ事四年あり鎌倉住人鎌田氏某此靈像を傳來せ一本

宮の靈一乃一より一享保十三年當寺一安一なる一と一と

妙典山戒行寺 同所南ニ隣る日蓮宗一延山一ニ屬せり
寛永の頃迄ハ花町一丁目の浄堀端一あり一常唱題目

修の庵室一なり一近隣宮重氏庵主一共ニ力を合セせ一

遂一一寺一と一當寺一の日貞師一ハ山本勘助晴幸一入道道鬼

齋一孫一ゆ一延山日悦上人一の徒弟一寛保中一八十餘歲一當寺一ハ明

曆一至一是一此地一ニ遷一る一徳門一の額一ニ妙典山一と書一せ一朝鮮

國李彦一の書一ニ此所一の坂一を戒行寺坂一又其下一の谷一を戒行

寺谷一と唱一へ一

分身鬼子母神一寺中圓立院一小安置一を定朝一の作一始一四谷北伊賀町

汐干觀世音菩薩 同所南寺町戒行寺一の裏一の坂口真言宗

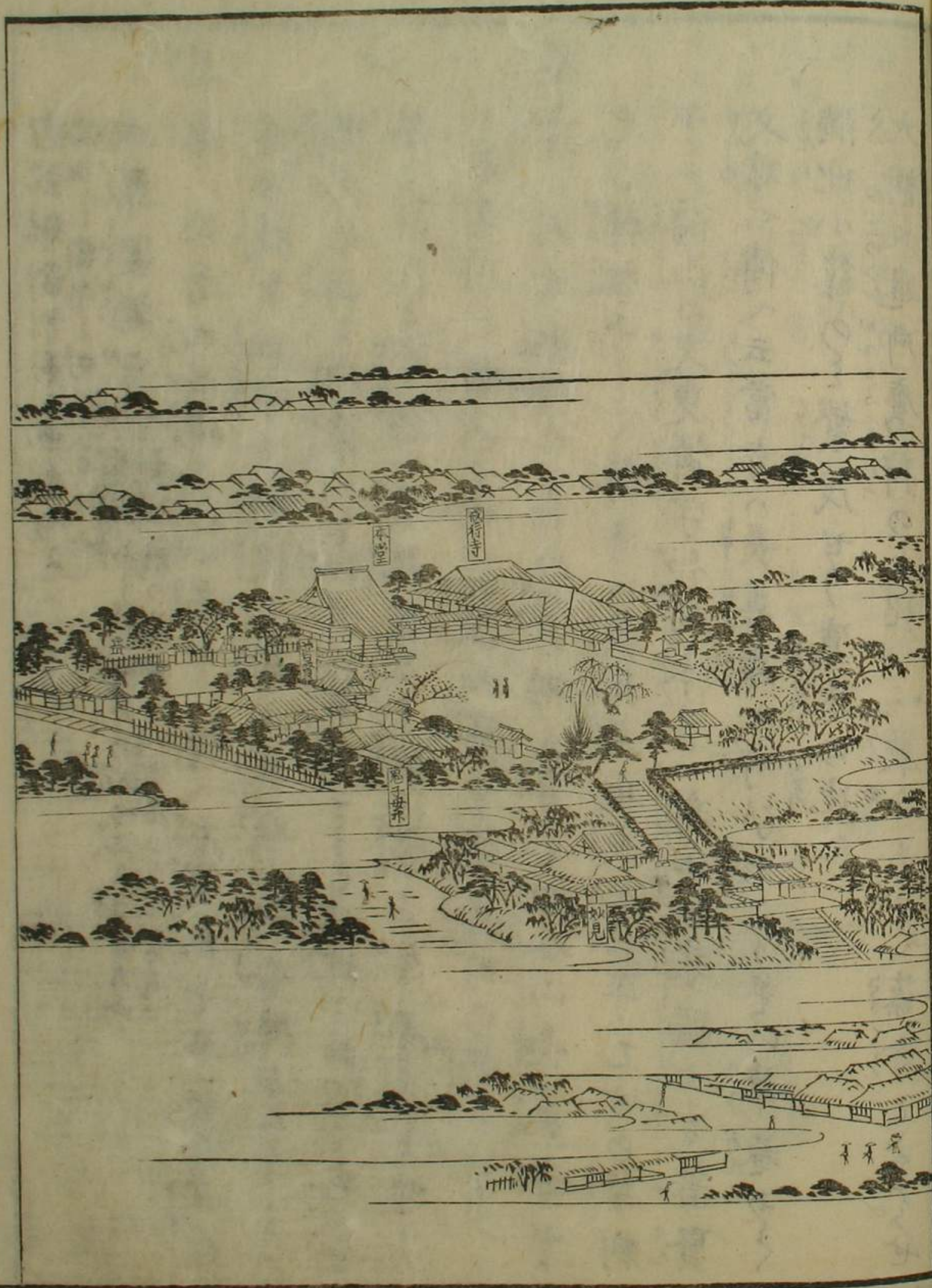
錦敬山真成院一あり一此本宮一ヲ越一後國村上義清一守佛一

其未流村上兵部入道道樂齋一大坂陣一の時上杉

景勝一後一奥州米澤一より彼地一ニ趣一く一後江戸一ニ歸一る一

當寺一ニ収一む一ると一村上天皇護身の一鑑踏一觀世音一と一号一く一

頼清常一崇信一一一後堂宇一を造一り安置一を大坂浄庫一の一村上



寛永寺當寺三世春心
 本尊聖觀音此作詳ある一尺斗の石の上は立せり
 忍原 同所四谷通りの小名あり傳へ云寛永十年癸酉武州
 忍の城を松平豆州侯に賜ふ其頃ハ御番城なり
 勤番の面々御家人を江戸へ召歸さる此地ハ地々宅地を
 賜ふされと云頃ハ廣原あり故に字ハ忍原と云呼し
 也忍川と唱る地ハ四谷の通り傳馬町の西あり
 篠寺 同所盛町三丁目の左の側ハ有る四谷山長善寺
 之禪林ハ篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創
 中ノ岡山ハ文叟隣學和尚本堂ハ釋迦如来脇士ハ普賢
 文珠之傳へ云當寺ハ長善庵と呼ひ形々草菴め
 満地小篠の繁茂せり寛永の比
 大樹此邊御鷹狩のと記 嚴命あり篠寺とよませ



篠寺といふハ四谷盛町の
 通り道より左の傍あり
 長善禪寺と号く昔
 序放鷹の頃寺に
 の庵室ハ満庭小篠
 の繁茂せり
 寛永の比
 大樹此邊御鷹狩の
 と記

あひ此地と寺境よりあり後此名あり故に吾證として今も
堂前より方三尺斗の地小藤の隈を總門の額に世寺と書
せし永平寺兼天和尚の筆なり

四谷大木戸 又大関戸 甲州及び青梅への街道なり土俗云霞ヶ関

或ハ旭の関を云と登御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷や
一筋道あり此關あり往還の人を糾問せし近頃を江戸

より附物も駄賃馬の荷物送状あきと通さざりとなり
今も猶駄賃馬の荷鞍あきと江戸宿又ハ荷問屋等此手

形を出しと通す其遺風あり此故やこれ番屋ハ町の
持あれせ突捧指膜鏡ホを飾置是往古關のありし時の

遺風なり又同所西の方此往還の道を横よりて石橋此
下と右へ流る小溝を櫻川とあり

内藤新宿 甲州街道の官驛あり 此地ハ旧内藤家の弟宅の地也
此後町屋とある故に名とす

日本橋より高井土造の行程凡四里餘あり人馬共勞
を依て元祿の頃此地の主人 官府小訴へて新驛舎を取立る

故に新宿の名有り然るとして故有りて享保の始廢せし
又明和九年壬辰再ハ公許をゆき驛舎を再興し今を繁

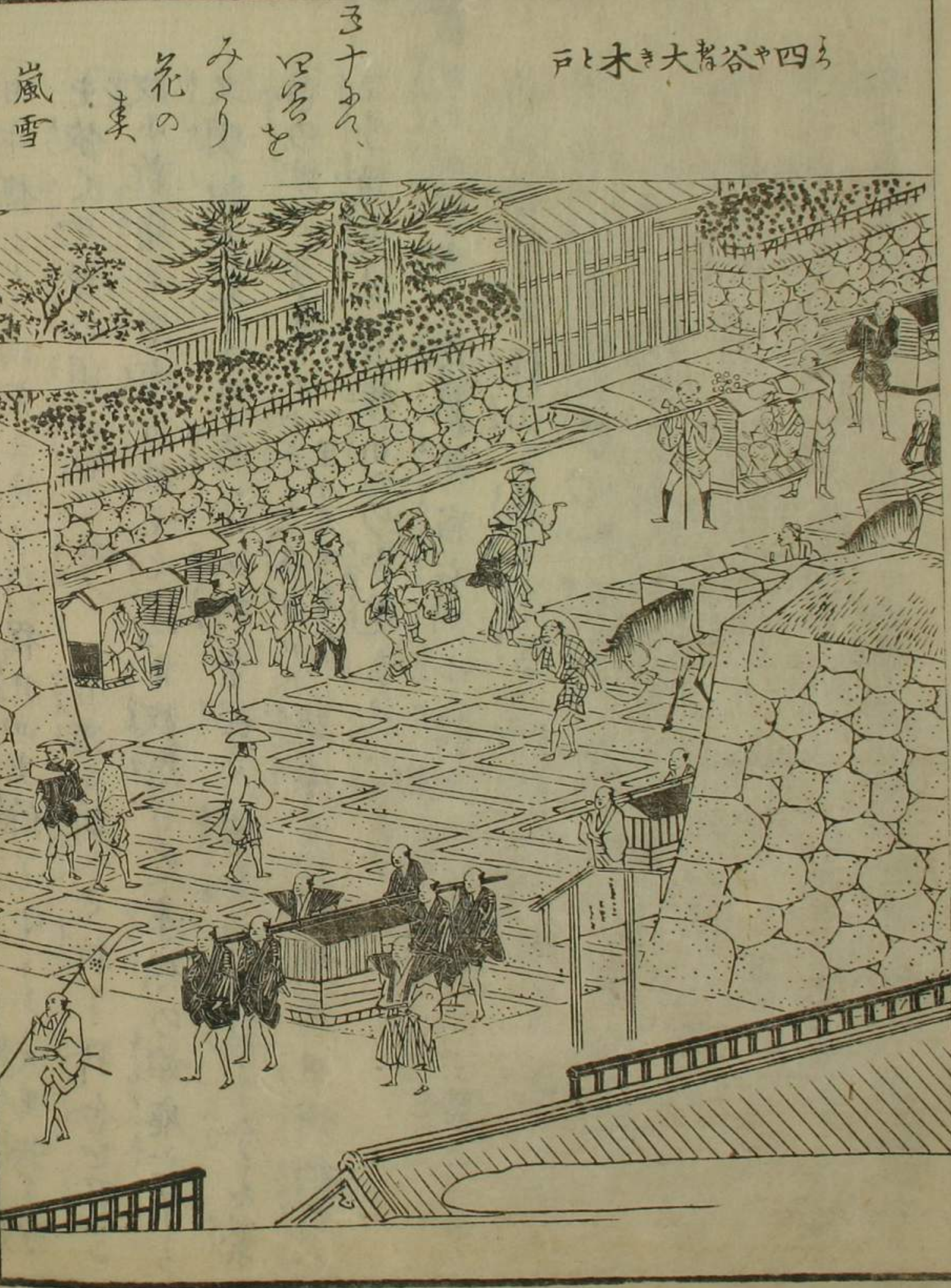
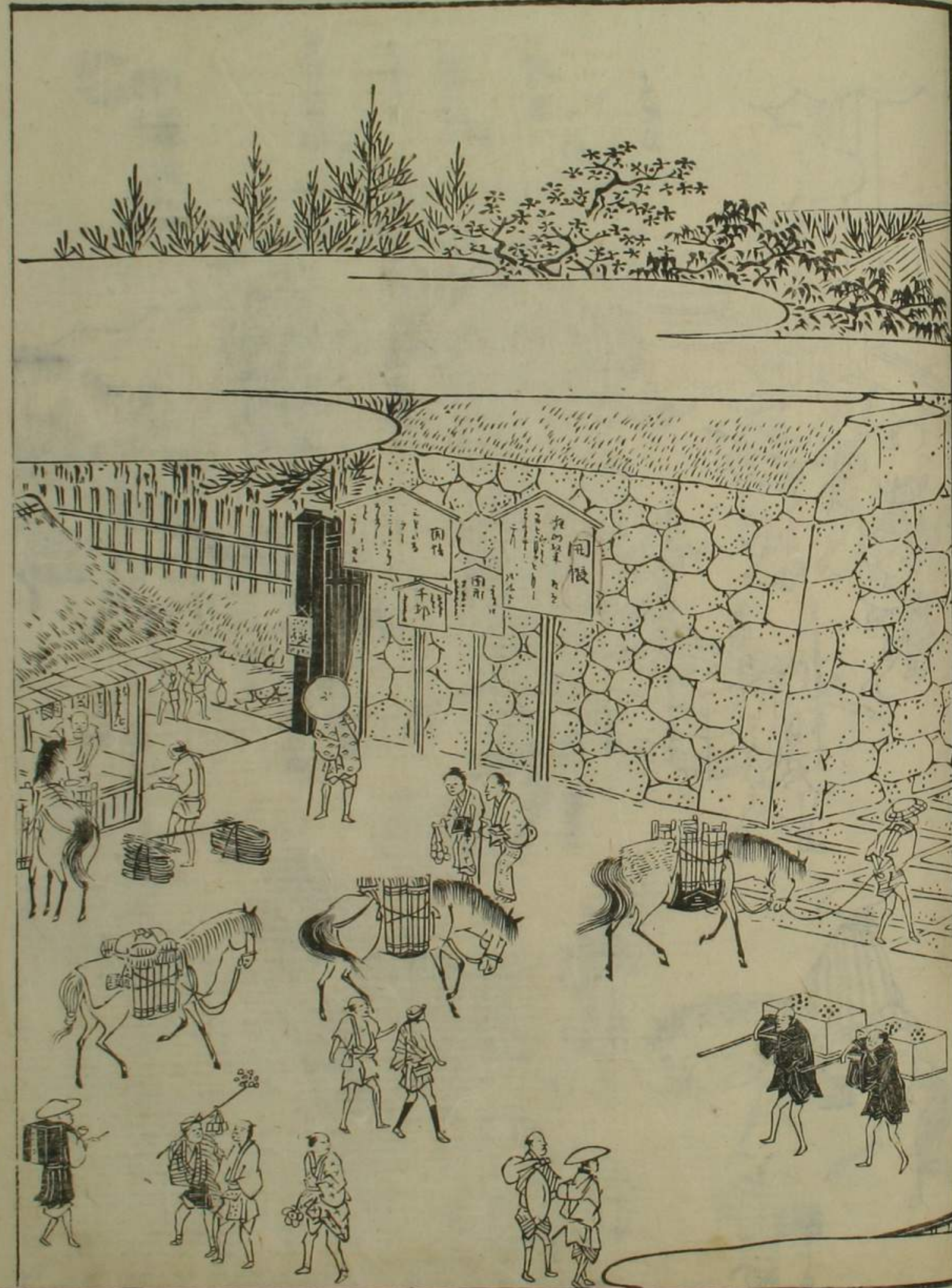
昌の地となり 此より高井戸へ 追分といハ同所甲州街道ハ
王子通及び青梅ホへの分道あれハなり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘あり
浄土宗ゆて縁山は屬本寺ハ阿弥陀如来ホて惠心僧都の

作開山念誓故心学玄和尚と号昔ハ三月ある草菴あり
しと寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜りて時此地に

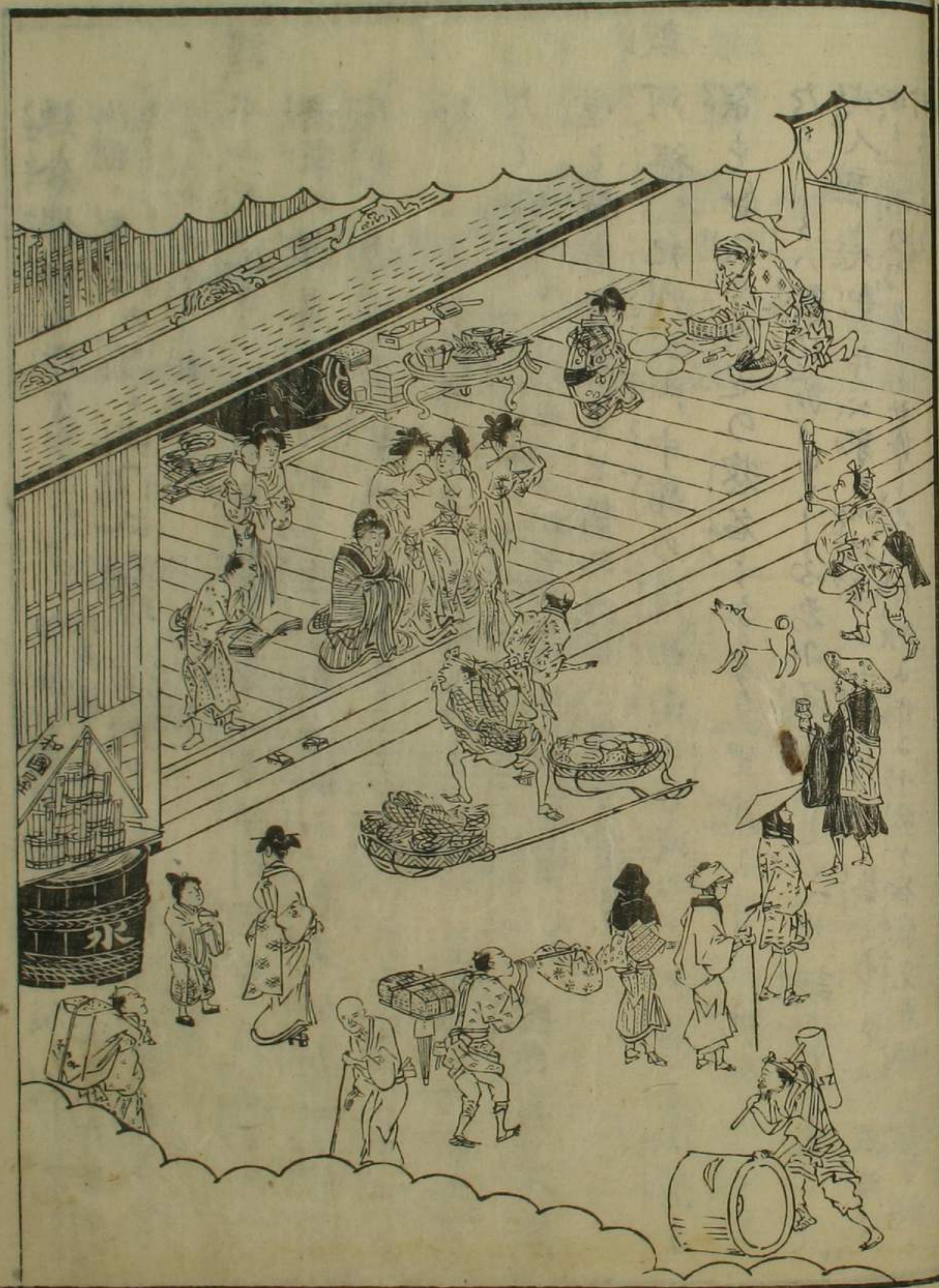
住る道心者ありし重頼若干の地を与へし廣路あり
以て大宗なりと云ハ重頼よりありし寺号を大宗と

付とありしより号とすと當寺牌堂のホミ 弥陀善逝の像ハ



四谷大木戸

五十丸
 四谷
 みどり
 花の
 東
 嵐雪



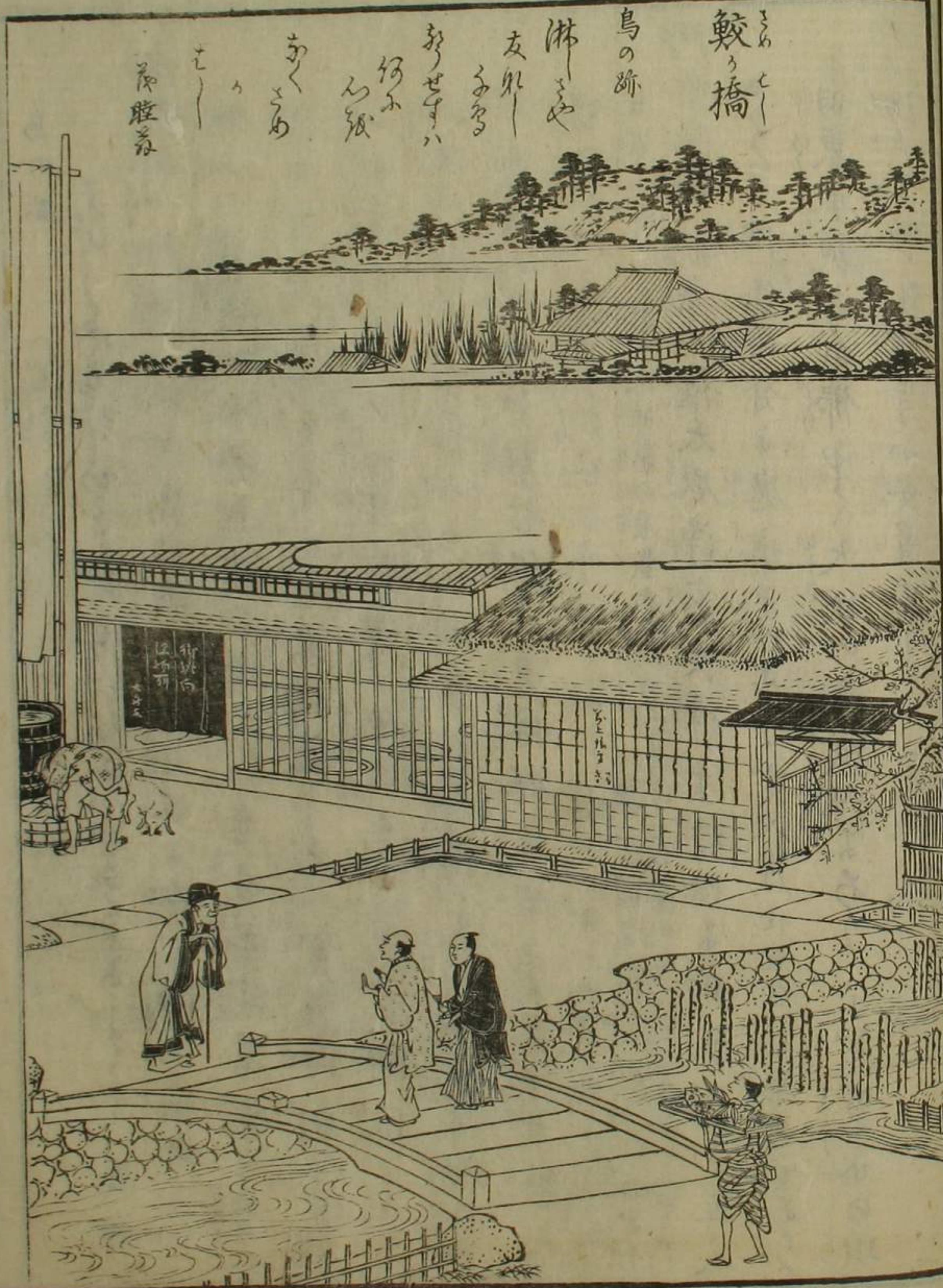
四谷
内藤新驛

節季の休

師走
の

七色成

味
お
返



鎌倉佛師の作なりといへり
 齊藤伊勢守二親善提の爲と記しありと云
 此齊藤といふは代々後倉に仕へる齊藤禪門
 浄圓の裔門の内は沙門正元坊に造立せし所の銅像の地花あり
 江戸六地花の第一番目なり
 護本山天龍寺 同所追分より南の方甲州街道北左あり
 濟家の禪窟中へて本多千手觀音開山ハ春屋和尚あり當寺
 其先ハ遠州の天龍川の辺にありしを後江戸に遷し牛込に
 ありし天和三年癸亥二月十六日火災よかり竟に此地に遷し
 延宝の江戸國に依り考ふ今牛込の牛込後歩町の
 西馬場のあり地を跡中へて今も元天竜寺前と云り
 境内に地藏
 堂と觀音堂あり又構の内は一里塚あり
 河橋 紀州公卿中節の後西南の方坂の下を流る小溝に
 架せしと云今此辺の惣名とありり里諺に昔此地海につつき
 たりしハ較のひらりと云ふ小名と云し之れ証と云ふた
 或人云く天和二年公家の日記録に上木村較橋とありと云く是時ハ此
 田も一本の内なりとあり又佐目河に作る千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘に較
 村とあり

鳥の跡

とびとめなれどもおせはけふのつとめをくさるる

茂睡

永固山一行院 較河橋の西の方千日谷に在る浄土宗あり

関山八源蓮社本誓利覚和尚との慶長年間草創を昔ハ

僅の草庵なりと永井家開基と一宇の浄刹とを関

山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政に仕へり多う刺深と

此地に庵をむきひ千日の間常行念佛を結願の時千日

不退轉の回向を勤む依り道俗群集せりあり千日寺と

唱へ又此を千日谷と呼ぶなり

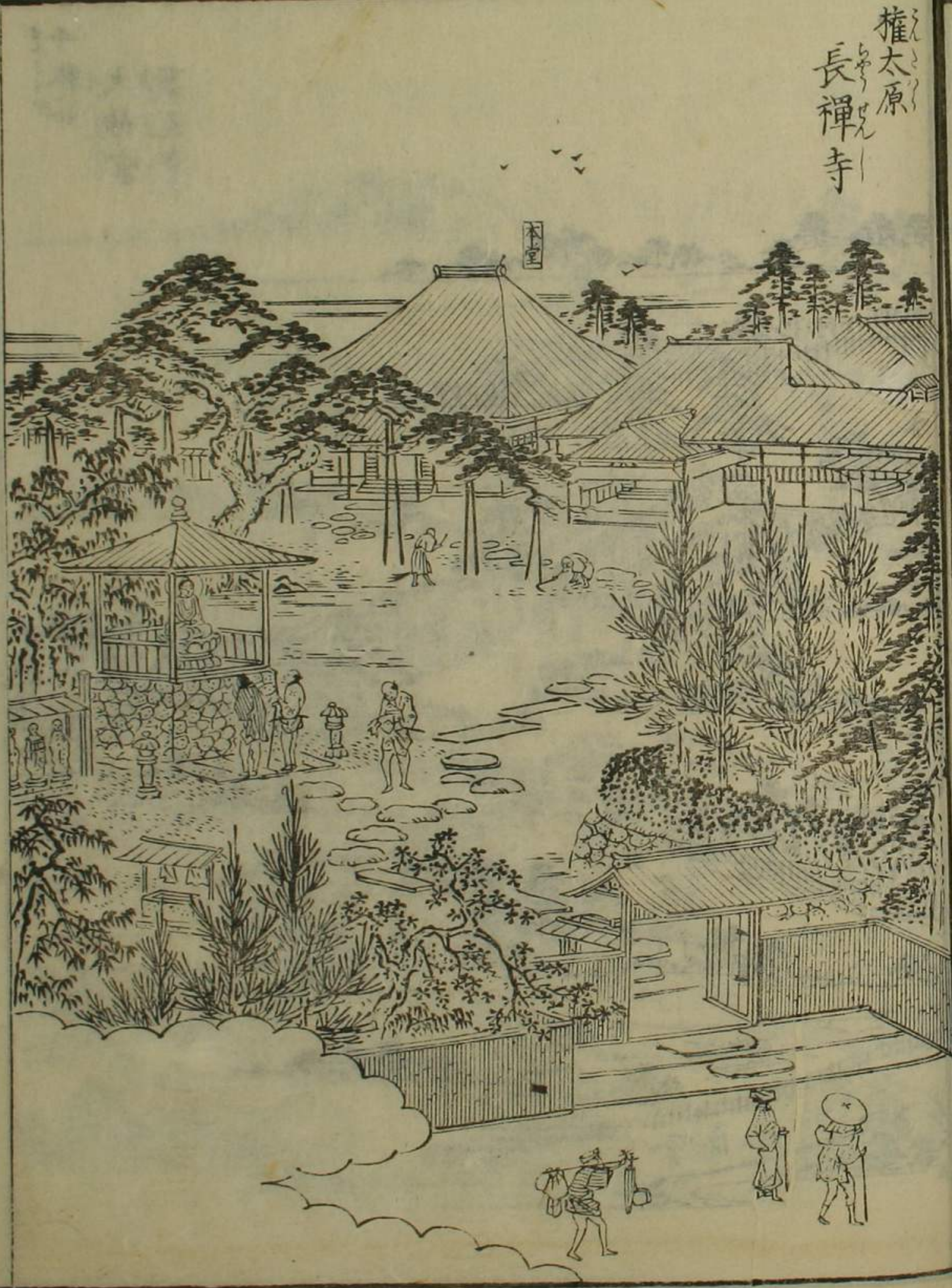
阿弥陀佛銅像 権太原浄家長禪寺境内に在り高さ五尺

とあり佛像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり

旧東本願寺の佛あり大坂の御城内にありと寛永の頃

江戸に移し當寺に安置せり

権太原
長禪寺





千光谷
大神宮
寂光寺

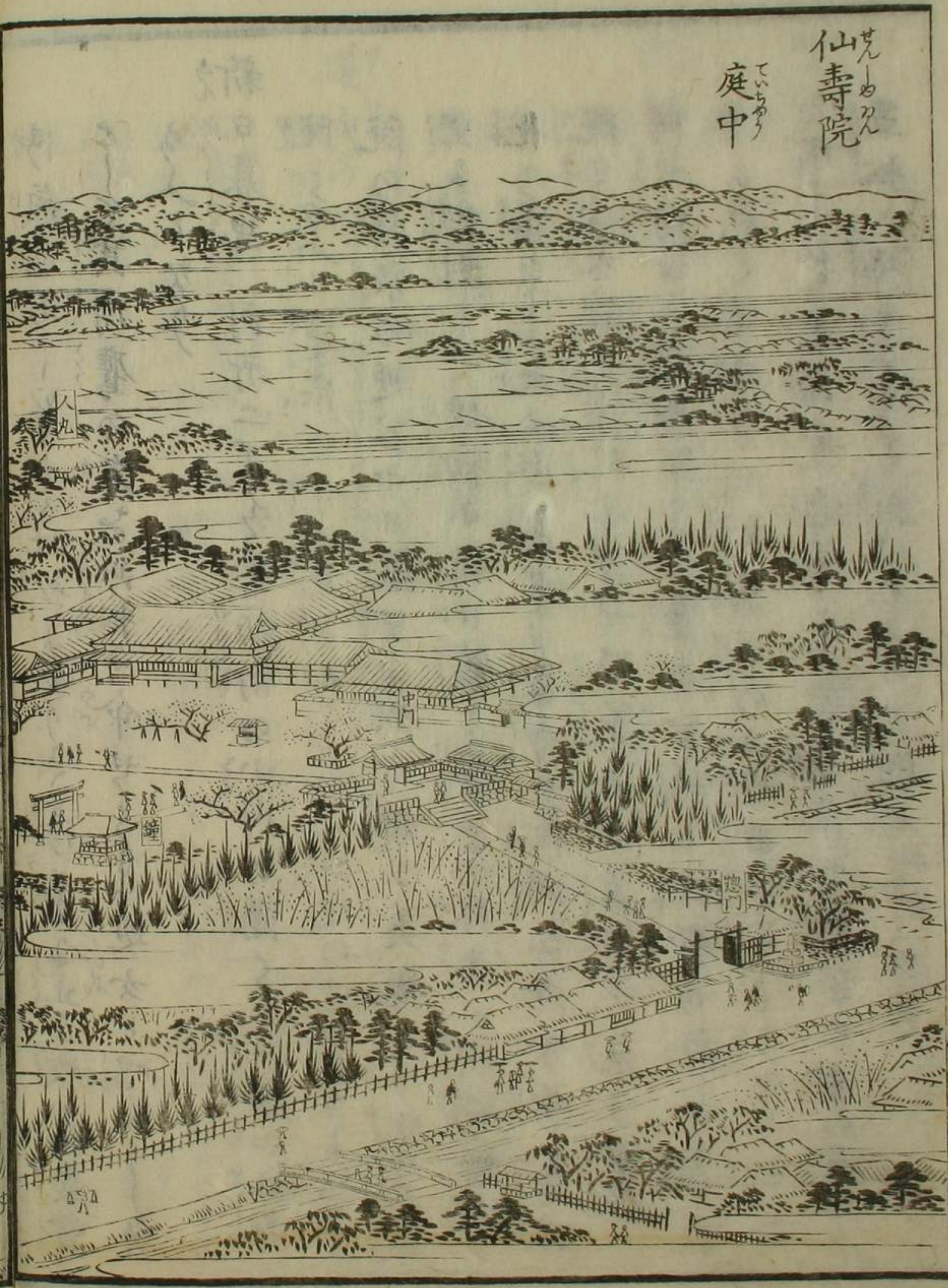
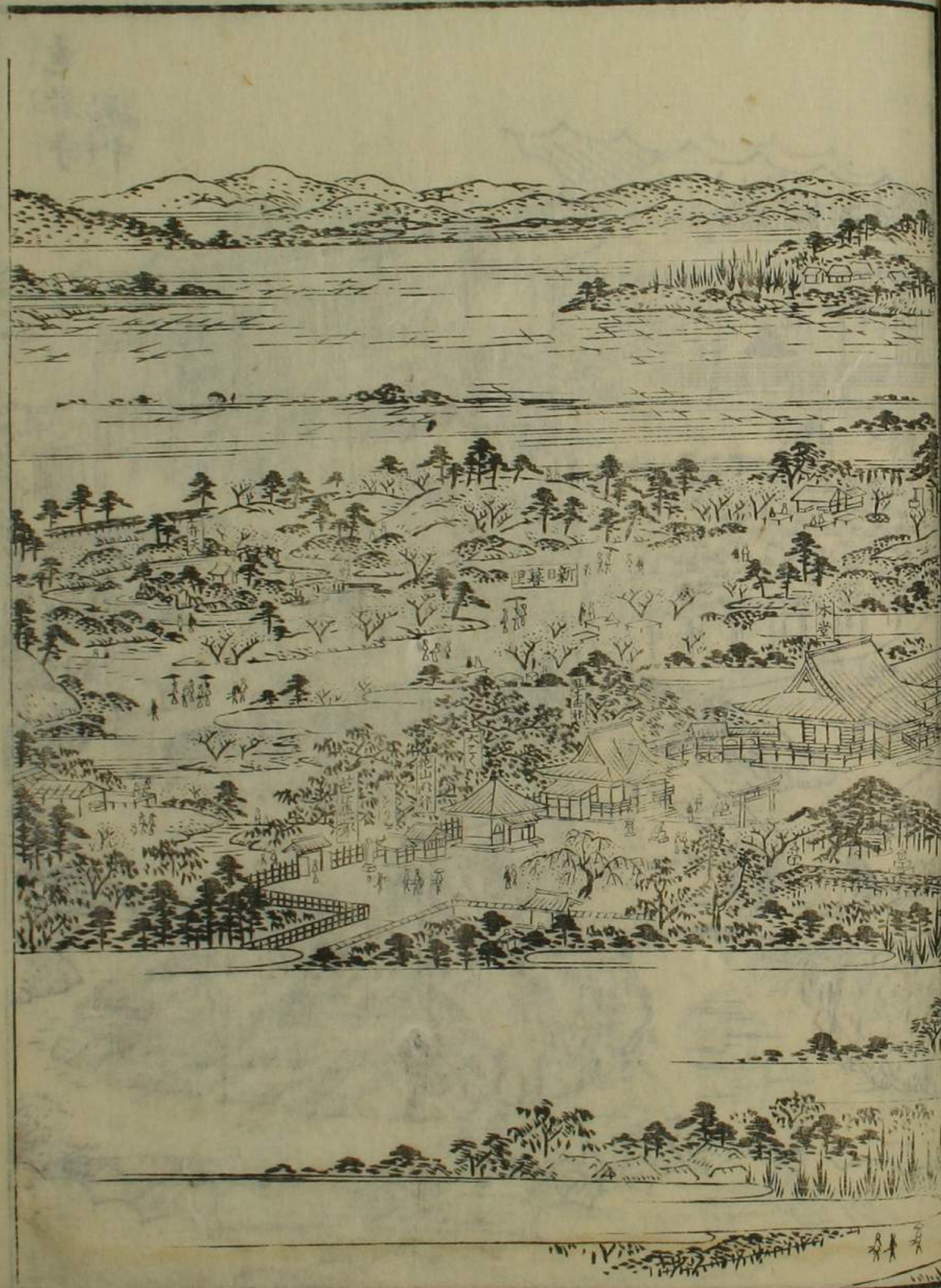
按は應永十四年足利將軍義持の時世なり佛軀をかくる穴あり疑ふ
昔兵乱の時損せしものありん歎
吾妻堤 同所あり往古の街道の餘波なりとく堤の形念
僅に残る

大神宮 同所涉焔硝倉の西の方より有る相傳の萬治年間
關東大は疫疾流行を富士の根方より神送る此地
祭るぬ然も其神輿の中は太神宮の所後有り依て此地
鎮護の為同所八幡宮の地は祠を建て是を勸請を此地

遊女の松 同所西小隣る天台宗寂光寺の境地は有り
當寺昔ハ彌町の貝塚の地ありし元祿の頃天台宗は改む今の
相傳ふ此地ハ往古の奥州街道ゆゑ廣野の原野ありふ
此松樹の鬱蒼とく栄茂く遠く見え渡里ハ亦霞の
松と号し寛永の頃 大樹此地は涉放鷹の時鷹翦て

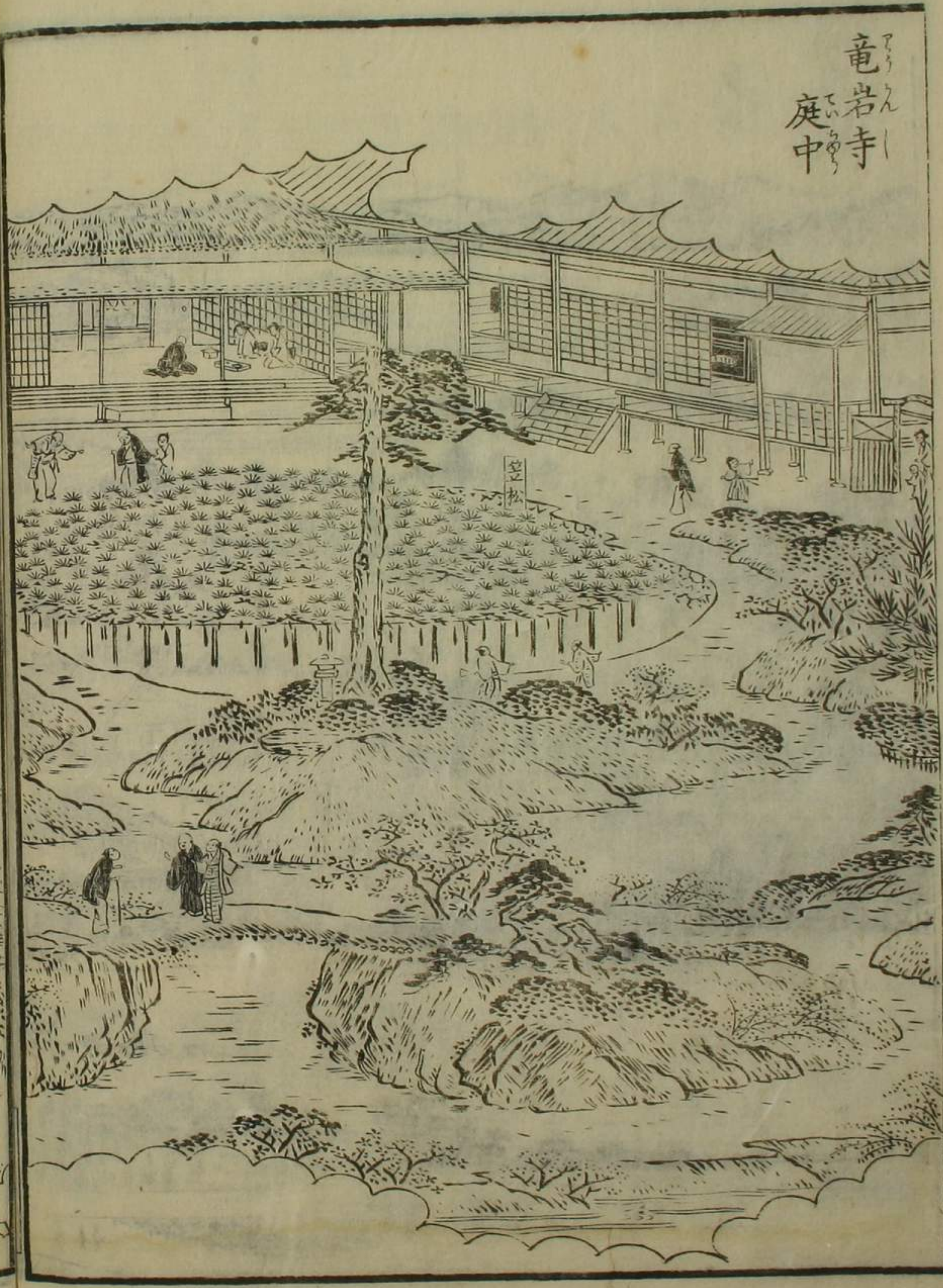
涉氣色ありかりし此松ありし涉拳止る故ハ褒賞
とて其濟鷹の名を此松に命せしと遊女と唱へし

新日暮里 同所二丁より西南の小川を隔て法雲山仙壽
院との日蓮宗の寺に庭をあるよと此辺の地勢とあり寺
院の林泉の趣谷中日暮里に似く頗る美觀なり故ハ日暮
里に相對して假初ハ新日暮と字せり弥生の頃爛漫と
花の盛るふハ大に群集せり當寺ハ紀州公御母堂養珠
院日心大妙正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ
同大妙甲の延嶺ゆゑ靈尔を感大野の辺に土中に
得られて後當寺開創落成の日安置ありとあり 同所
一町を隔て東南龍岩寺とあり濟家の禅宗の寺の庭中小
笠松と稱するあり枝のまろり三間ありあり





龍岩寺
庭中



千駄ヶ谷観音堂 寂光寺より二町をかり西北の方よりありと観

谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置也

本尊如意輪観音ハ當寺開山行基大士の彫像也

三尺五寸あり世俗目玉の観音と字にあり

三尺五寸あり世俗目玉の観音と字にあり

自ら持る所の子貫を死せり此地の齋氏某目のあり是を

當寺と号す

縁起曰神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃同年初夏

暫く此地の息ひあみ時如意輪觀世音傍の谷より

出現しあひ大士に靈あり依り佛意に應じかこあり

古株を佛材とて此を彫刻しなる故小觀谷聖輪

の号ありとの事

千駄ヶ谷八幡宮 同所一丁許西よりあり此辺の惣鎮守也

例祭ハ九月廿七日あり別當ハ真言宗高雲山瑞圓寺

と号す

鈴懸松 此松の老樹あり寛永の頃大樹此地に放鷹の時

社記云往昔此地深林の中は時とて瑞雲現し又

或時碧空より白氣降り雲上り散る村民怪むく彼

林の下に至るは忽然とて白鳩數多西をさし飛され

依り其靈瑞を稱し小祠を營て名つけ鳩森とて貞觀

二年慈覺大師東國遊化の頃村民等大師鳩森の神

跡を乞求む依り宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移り

古をひき神功皇后應神天皇春日明神等の尊幹を

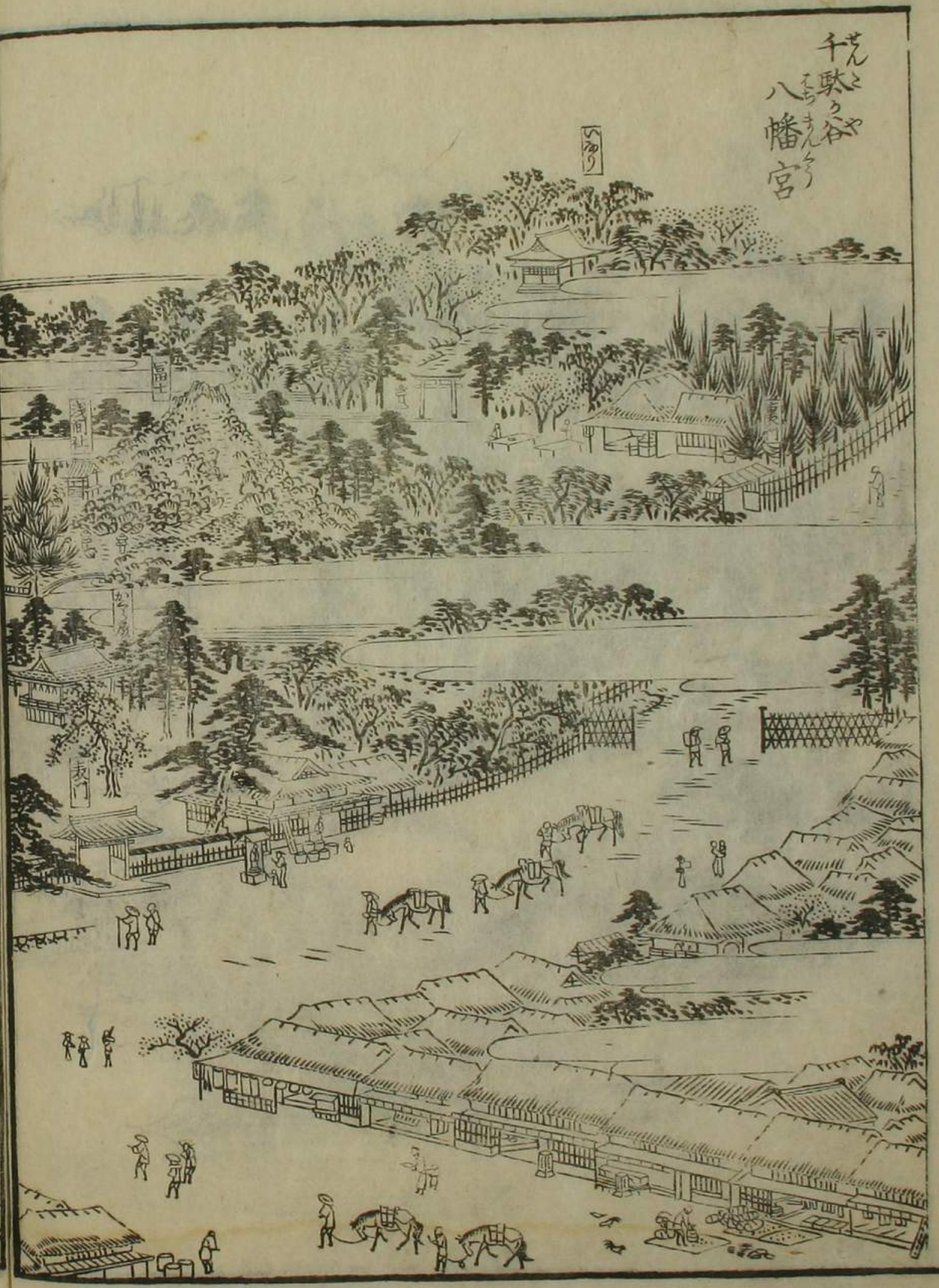
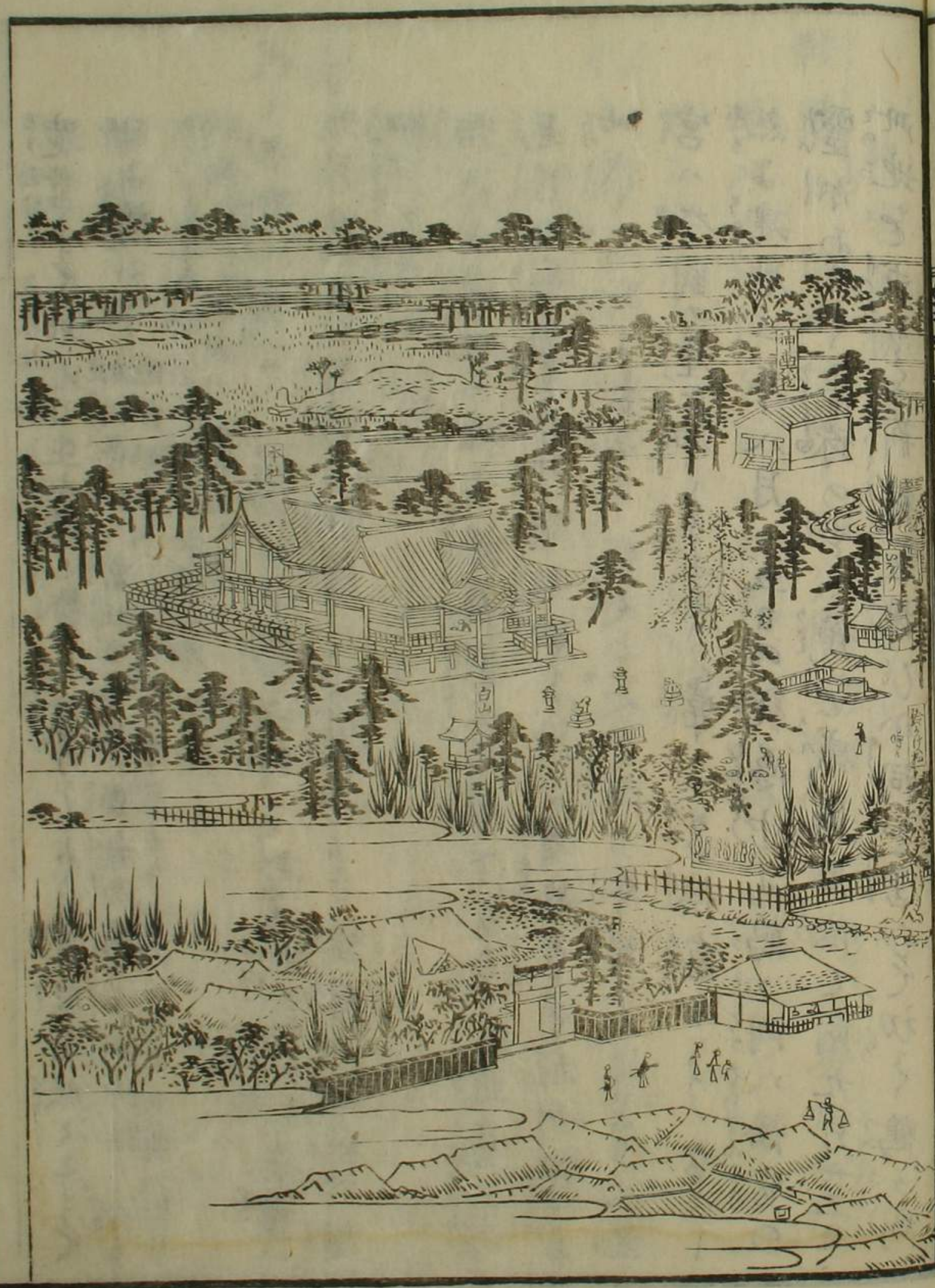
作り添て正八幡宮と崇りあり遙く後久寿年間淡谷

正俊領地鎮座の御神なるを以て金玉丸生前隨身の

本尊惠心僧都の作の弥陀如来の像を本地佛とて社を



千駄谷
観音堂



造営して此地の生土神と称し（此の地は生土神と稱し）より靈應ハ昭々として
日ノ新あり（南無向亭云々）當社の前路ハ鎌倉街道の旧跡也（鎌倉街道の旧跡也）今も
所領の中ニ千駄ヶ谷の名有る（北条家分限帳島津探四郎）

代々木野八幡宮 同西の方代々木野の河を野の中なり祭禮ハ
九月廿三日は修禊を別當ハ天台宗より宝珠山福泉寺智
妙院と号す（古ハ知明）

相傳ふ當社ハ往古源頼家公の旗下なりける近藤三郎
是茂の家人荒井外記智明とす者故ありて相州を退き
此代々木野の蟄居し宗友と名を改め年月を送り八幡

宮ハ本國の産土神とすあり常は信怠るものなり
然る建曆二年八月十五日の夜夢中ニ鶴ヶ岡八幡宮の
靈ルありて宝珠の鏡を感得せ依て同九月廿三日

此地を求めて荆棘を拂ひ小祠を営む初め鶴ヶ岡
八幡宮を勧請し（此の地は）

鞍懸松 同所の岡ニ在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の
頃此地ニ陣を取此松樹の枝小鞍をかげらとす（此の地は）

代々木橋 甲州街道萩窪の立場より三丁あり先の方松
原赤堤泉廻り代々木等の五箇村入合の辻より曲折する

雨の道路を横切り流る小川小架は橋より右に流る
橋下より水流 橋上小土を覆ふ形頭（此の地は）

高井戸 此の甲州街道より驛舎あり（此の地は）
ハ二里一丁あり八五此所ハ下高井戸より上高井戸ハ此所あり

西にあり小田原北条家の分限帳ニ大橋氏某の所領に
無連高井堂とあり（無連ハ此の地あり）

和奇ハ此の西にあり（和奇ハ此の西にあり）

代々々々木々八幡宮



代太橋



鬼子母神 下高井戸の道 清月山 覚蔵寺とつる 日蓮宗の

寺に安置す 鬼子母神の靈像 八宗祖大士の作や 佛

像の脊小建長五年癸丑八月八日日蓮刻之とあり

縁起曰文永八年九月十二日日蓮大士相州龍口より此の誅伏せんせられ

りひ 貞一人の老女ありて 胡麻の餅を代りて 大士歡喜のあり建長

五年の夏始て 法蓮花徑の首題を唱へ 始りて 村廣宣流布のりけの

為自得造あり 法流守獲の鬼子母神の靈像を被老女は授けり 然りて

此靈像を傳へ 時々 集保十八年癸丑五月此靈像俗家より出て 法味ふに

此靈像を傳へ 時々 集保十八年癸丑五月此靈像俗家より出て 法味ふに

日曜師の附着せり 然りて 日曜師當寺の破壊を致さ 寺院再興の爲爰に移

住せり 今所渭布田邑是なり 布田城布多小作の此地布多天神寺

此地ハ甲州街道や 上下と分れ 石原上下國領を合て 布田五宿と稱ふ

武蔵國風土記曰 多磨郡 布田 或新田 公穀 三字 田假栗

爾 布田 或新田 公穀 三字 田假栗 布田 或新田 公穀 三字 田假栗

爾 布田 或新田 公穀 三字 田假栗 布田 或新田 公穀 三字 田假栗

爾 布田 或新田 公穀 三字 田假栗 布田 或新田 公穀 三字 田假栗

和名類聚抄曰 多磨郡 新田 尔布多云云

按風土記云此郡の雨布田及び和名抄に載る所の新田共に此地の
 土記に尔布田川の名あれども今考へりて

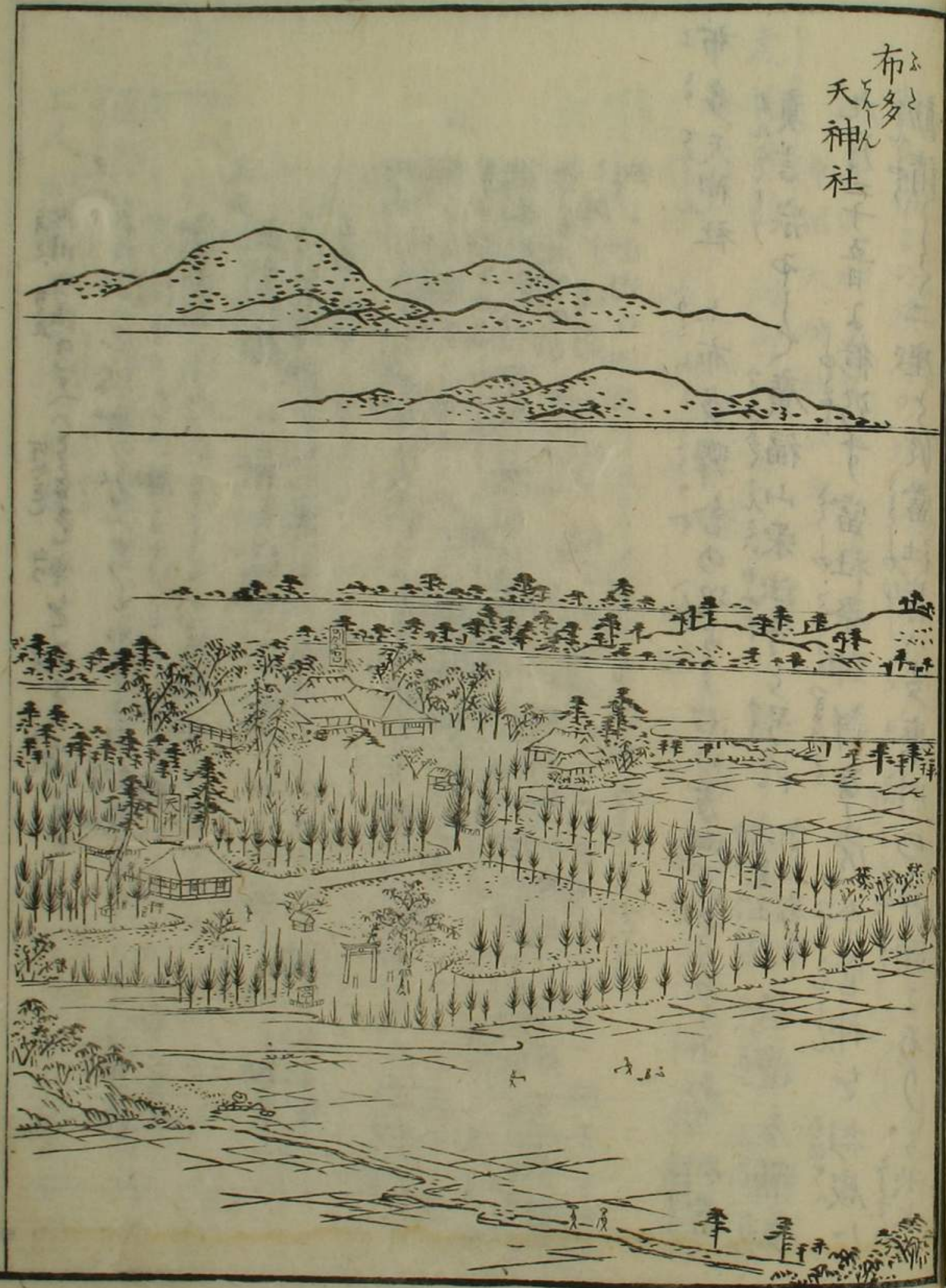
多麻河泊尔左良須氏豆久利佐良尔奈仁
 曾許能兒乃已許太可奈之伎

家集

自作ささげ垣根の朝露をつつぬきとぬぬ河の里 定家

按万葉集多磨郡多麻河又古ハ布多と云々往古麻の布を
 多磨産せしあり假字ハハれと意を合して麻ハ作らるる
 國の府ハ此地より西南ありて遠く麻ハ作らるる
 内産麻ハ納り然ハ此國より貢せりて國司の海へかせり
 依多麻川の水流を考へて中流の地より水原ハ向來
 多磨川より下流ハ漸海に近きハ麻ハ作らるる
 ありて此布田の地ハ麻ハ作らるる
 三月の頃より七八月にかけて此地の草刈り
 其形勢及び唄ひ物の言葉ハ麻ハ作らるる

布多
 天神社



此川の流のまはとさくち布を流さハ海まで

又云
あのみハヤレ松屋の子マシのわさくぬねぼりさーにぬり
ツツのぼりさくしひ瀬はぼりさくすもぼりさくさーぬりさくさ
ぼりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
ぼりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

又云
強金の鶴三三羽まひひあち通ひやう山越く山を越して
くか川に下りての用さしあけさくさくさくさくさくさくさく
あめさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

此頃ひのち古を抄ひあひさくさくさくさくさくさくさく
間深屋邑と称さる地あり是れ古併りさくさくさくさくさく
遊別當の安房上野局の作らる所別當の元ハ近瀬局と云
あさ此辺の地を抄ひさくさくさくさくさくさくさくさく
と誂す同書に今按は俗は手作布の三字を用ゆると云く調布を和名
扱は豆岐の沼能とありて貢よある布の字をとり

布多天神社 上布多驛舎の辺より右の方四丁さくさくさくあり別當ハ

真言宗中々く廣福山采法寺と号は 浅尾王禪 祭禮を隔年

九月二十五日修す當社祭神詳ならず今菅神を相殿に
勸請し二座と云當社昔ハ多磨川の岸頭ありしう洪水の

難は罹るの後今の地へ遷すとあり 今地ハ元天神と稱し
延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡

虎拍神社 同所北の方十丁計を隔て佐須村あり 佐須村ハ古

判の姓なりしを後地名と号し 社前ハ古松二株鬱叢と
其の遠裔此地の里に云く 軒櫛なり今も

武蔵國風土記曰 武蔵國多磨郡拍江郷
虎拍神社 圭田 七十三束 所祭大歳御祖神也
崇峻天皇二年己酉八月始祭事有之云云

延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡
虎拍神社云云 武蔵國多磨郡
虎拍神社云云 武蔵國多磨郡

虎拍山祇園寺 同所三丁さくさく東の方あり日光院と号す天台

宗深大寺は属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功
上人開創さくさくの佛域なりと云く本尊ハ立像二尺計の弥勒

虎拍山祇園寺 同所三丁さくさく東の方あり日光院と号す天台
宗深大寺は属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功
上人開創さくさくの佛域なりと云く本尊ハ立像二尺計の弥勒

青渭社
虎柏社



如來の本佛と安置す作者未詳 本堂の向拜の掲る所の虎柏山の
三大字ハ筆者とあり

藥師堂 本堂の前右の方より藥師佛ハ立像御長一尺

そとありて行基大士の彫造なりとあり佛龕の内は弘法大師の真跡の般善心徑と収む

此堂宇二百有餘年なりとあり此地より東南の方三四十歩を隔て耕田の中ありとあり

賊の為ニ佛器の類ひと棄つれり今古藥師堂と其頃屢

遷せしとなり今藥師堂より一丁程南に藥師堂面と字し一及六畝を

狗江入道日館地 祇園寺より良の方六七町を隔て二百歩あり

の岡なり空堀の形なりと嚴然とて残り此地は入道崇む

所の稻荷の小祠あり土人里の稻荷と稱す祠前控の老

樹一株六圍ありありの存せり東鑑は兼元二年戊辰七月十五日

ぬく武蔵國威光寺領内小北入田と川根籍小及山由院主の傍圓海

狛江入道
 旧跡
 祇園寺



此地を字々天神ヶ谷戸と云ふと祭神詳ならず世々
 青波天神と稱せり相傳ふ古ハ社前ハ湖水あり
 青波の称ありと社前楓の老樹あり教百餘霜を經る
 延喜式神名帳曰 武蔵國多磨郡
 青渭神社云云
 按ニ神名帳ニ青渭とあり今本阿遠伊と訓す土人云古當社の前ハ湖
 水満々たり故ニ青波の稱ありと云ふ今青波ハ作リ阿遠葉と訓せりハ
 櫻ありふ然り後同卷青渭明神の条下と意照て
 許のののを挙るハ本狛江ハ作るハ狛江と誤り又同書建久元年庚戌
 十一月七日二品入落供奉の人名の内小駒江平四郎といふ名を注す
 按ニ贋日本後紀ハ仁明天皇の義和十一年甲子五月武蔵國多磨郡狛江
 郷より節婦を討つるを載らるるハ本狛江ハ作るハ狛江と誤れり
 武蔵國風土記殘編ハ多磨郡の内ハ狛江郷といふ地名を平
 和名類聚抄中同郡の郷名ハ狛江とあり古狛江と訓すこれ
 地を今ハ佐須村と稱ふ者ハ多磨川の北宇奈根村に隣りて駒井邑と
 呼み地あり恐らくハ狛江の郷の移説なり北条家の限帳ハ多波川の北
 駒井本郷太田新六郎知妙の内ハあり此ハ駒井の旧地あり
 青渭神社 虎拍神社より北の方深大寺村の中あり土人

青渭堤 青渭神社の辺あり古ハ青渭の湖水湛々として後

世堤と切開き水を乾し耕田とありとてり故に今此の

彼所ハ六七歩或八十歩ありまゝの塚のめまゝの残り存して

草樹繁茂せるハ其堤の旧跡ありといふ

浮岳山深大寺 昌樂院と号し深大寺邑にあり

里と号せ大古ハ法相宗ありし惠亮和尚以来天台宗に改む

本寺ハ宝冠の阿弥陀如来惠心僧都の作ありといふ當寺に

福満童子の宿願ありて天平五年癸酉に草創せしむ

佛城なり 日本年代記合鈔曰天平勝宝四十七代廢帝御宇

小勅頭所と定られしより平城清和兩朝も又勅頭所と

なりといふこと云

元三大師堂 本堂の前左に傍てあり寺記に云應和四年慈惠大師

和尚と惠心僧都と此の影像を造りし武藏國深大寺ハ代々の帝勅頭

の十八日ハ別業護摩供と修行ありたふ近郷の人群参り此日門

前より市を立つ

降魔尊像 先の靈像と共ニ巖山より當寺に遷座五大尊石

中ハ此の水早暈中ハ減りて云々

年の傍にあり昔此山崖に崩れし石を建て要石と号し云

鐘樓 大寺堂の傍にあり

武藏國多東郡深大寺

右奉治鑄鐘長四尺三寸口二尺三寸

鑄有破裂而無聲或雖討得薄畧而不一或雖右

數降臨勅力廻皇風永痛佛日明成就仍昭銘功

常轉更乞諸檀主二世善願一切成就仍昭銘功

德其辭曰山名浮岳新鑄鳧鐘

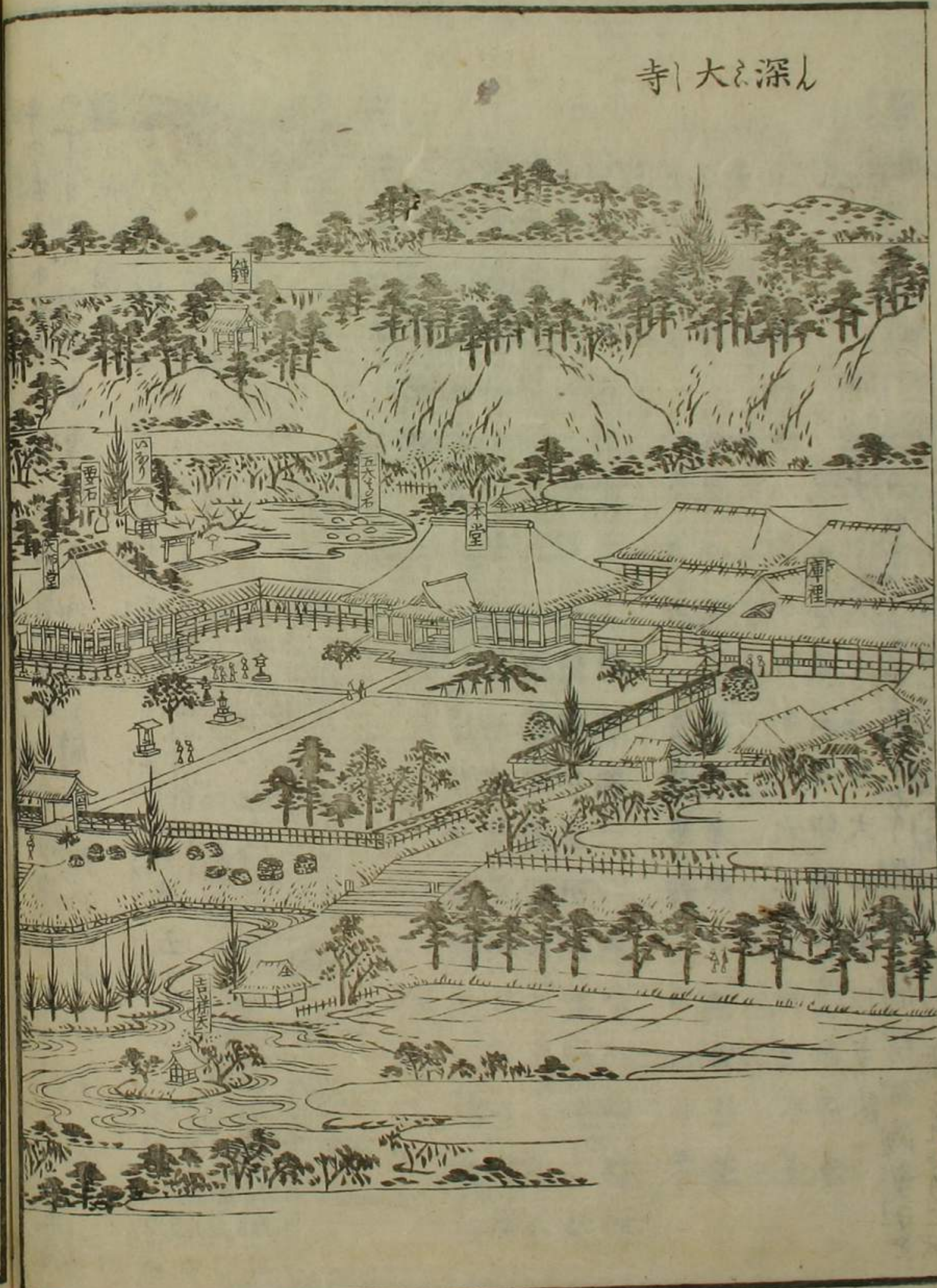
百千生劫大令八人行事五日大工山城守宗光

滅罪生善丙辰八月十日正法印大和尚守慧運

龜島辨財天祠 別當前大僧正法印大和尚守慧運



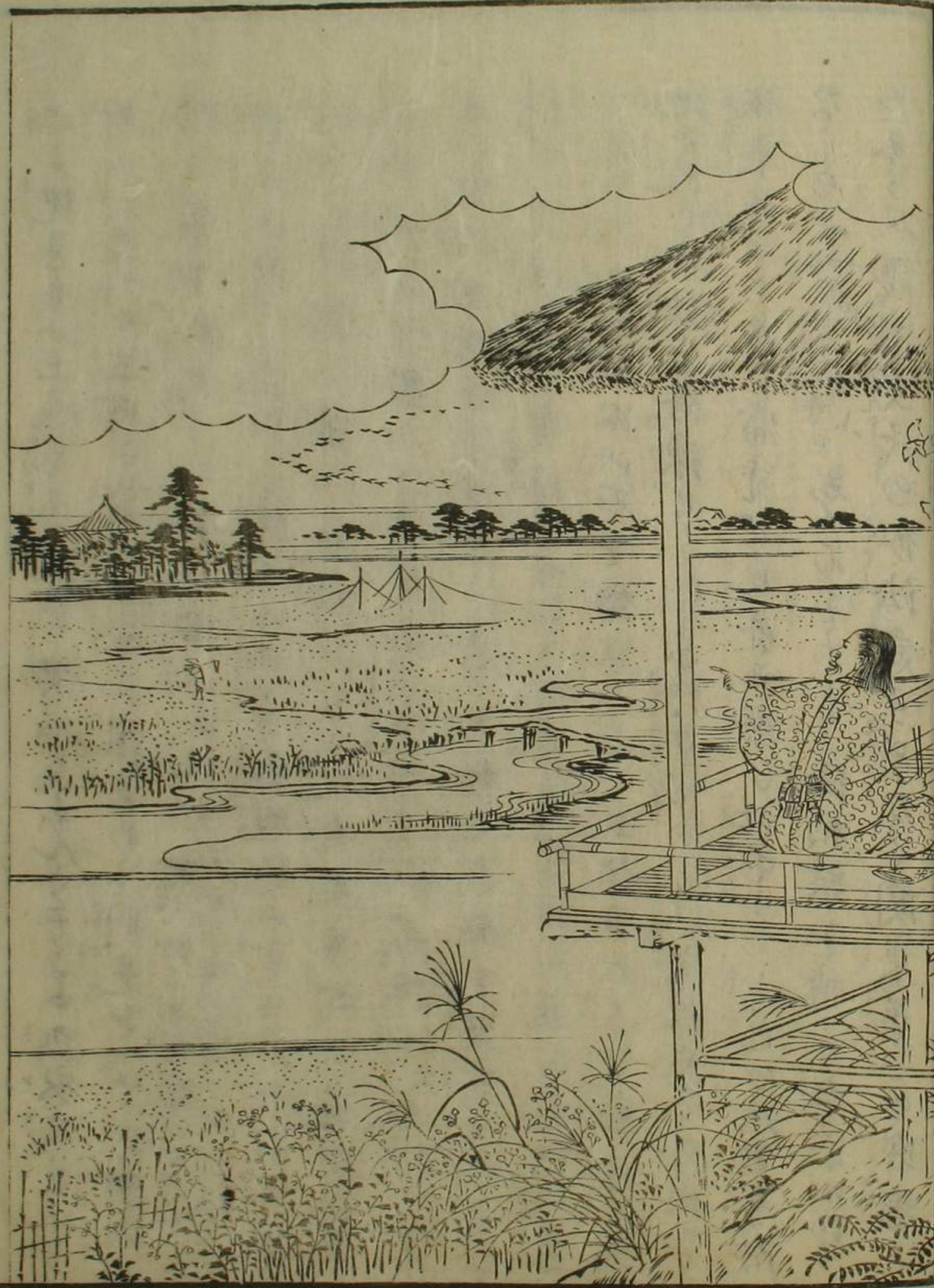
寺 大 深 人



毘沙門天吉祥天社 昔各別社ありて後天の相繼ふ合祭す
の童女をありて祭す相繼ふ天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を
深砂大王社 宮に並木相對す縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を

縁起曰 聖武天皇の御宇武蔵國多磨郡柏野村に獵師ありて
柏野村今佐名を右近といふ年頃山に入水に臨むに殺生を業と爲
須村といふある時やむとありて女來りて妻とある名を虎とあり此妻
常小夫とありてめく殺生とありて右近の妻のいふ隨ひ竟に

狩漁を止むと後一人の娘をまうけりてかかりて大くかかりて
早く生長あり然る福満と唱ふる童子ありて此娘は逢初と
これハ父母大に怒りてを賤しと人よあをせんり本意あるを
とて二人の中をとりて娘をハ此里の池の中島に家を営みかこふ
居しむ福満ハ日毎岸に至りて是を歎くといふもかひなく昔
ころころの玄井三蔵渡天の時流砂川に至りて佛を念せしうハ
深砂王現きとひ川を涉りて思ひて一心に念しこれハ
一の靈龜浮きぬ福満を甲に乗る島に至り娘をあへりて
得たり父母後此を聞き神明の冥助ありてを知り隨喜
して娘を福満小妻ありせられハ竟一人の男子をまうけりて父母の
願ゆかりて此兒出家し満功上人といふに後ころころハ渡り大衆
法相の旨を傳へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓により
深砂大王の社を建立し當寺を創せし時神靈水中に岩



深大寺蕎麥
湯寺の花
申して
味ひを
佳あり
都下
稱して
深大寺
蕎麥
とよ

上より現るもの上人 其容を摸しとめんともいふ衣本なり
然中七月七日玉川小靈本の流れ漂ふあり則是をいひく薬師
佛三幹を彫刻し一幹を當社に納む 餘二幹は下野國日光此由山及び出羽國あり
廢帝の御宇勅願所不定られ浮岳山深
大寺と震翰を瀝き扁額をあり又貞觀年間武藏國司藏
宗卿叛逆を廢山の惠亮和尚より仰く乱賊降伏を祈り
あり和尚當國の國分寺に至り不動の利剣を虚空に投り
傾る所の勝地を道場とせむと誓ひあり不遠小飛く當寺并泉
の辺の石上より傾ぬ此石を劍立の石と云依五大を勧請し此
地に於て秘法を修練せられし行力空しくは逆徒悉く降伏せり
依廢感のあり當寺を惠亮に賜ひ此所より七邑の地を寄附
なりあり 七邑と唱ふ ありありより法相宗を傳へ台宗あり
たれこれ護國安民の秘法怠るまなく關東第一の密場と

なり 昔ハ十二字の塔頭あり大伽藍あり 其後野火の災に罹
るべく灰燼とありしと世田谷の吉良家深く信し再ひ
堂宇を營み波平行安の刀を寄附す 無銘長四尺五寸あり
繪卷物并詞書二卷 参議右中将藤原公尹卿筆
抑當寺ハ關東融通念佛最初弘通の道場なりと慈眼
大師 大猷公の上聞の達し なり 融通念佛百遍を
受させ賜ひ忝も結縁の名帳小御諱を記させありぬ
當寺融通念佛の縁起小詳なり 此念佛ハ大原の良忍上人現ハ如来の教をばく弘通あり
他の人の為と 他人の唱ふ功德の稱名をハ自らの為として互に融通し 自他
平等しこの念仏の結縁をハ 由縁起ハ前以て佳品なり然れ
深大寺蕎麥 當寺の名産とす 都下より稱し佳品なり 此名を冠し
難波田彈正城址 深大寺大門松列樹の東の方の岡を云土人を

城山と呼し今ハ麥畑とあるところも此所彼所ハ湟池の形
残り此地ハ往古 清和帝の御宇蔵宗卿武蔵國司
とあり時々小住せられし一田館の跡や天文の頃上杉

朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてこゝハ
城廓を構へしりしと云

北條五代記曰上杉修理大夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳わし家
徳武州深大寺とつら古城を再興し北條氏綱に向ひ引矢の企あり
とつら茶下ハ七牌ハ天文六年 されかたけ中ハ松山にありの田の
難波田ありはかこしりし松山とて後波北條が山中主権移す
よせ一首ハかくとてしりしと云

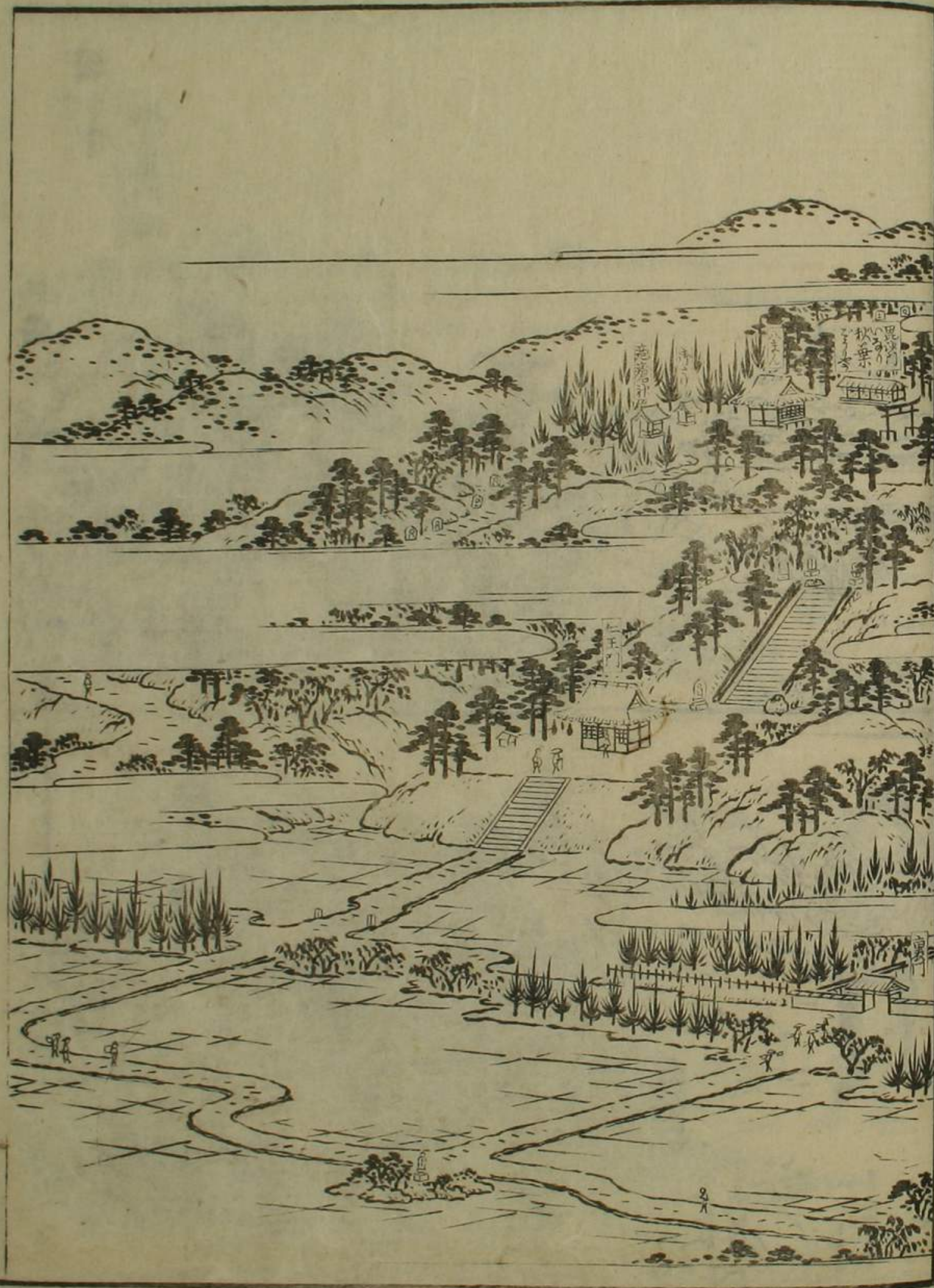
と備替時ハあきらけし難波田もさすありは武士のつらとつら
我作りつは古今集の歌をとりあせり返答ありくつら松山ハあ
にゆらあもあありぬし主君朝定を館置難波田つら松山ハあ
浪もこそぬし身と金ばらぬつらと忠臣の法とありあり作者のひ功者とい

深大寺城跡 深大寺佛堂の後の方の山續やとて間六七丁を
隔り空堀或ハ柵門杯ありしと覺しと形今猶嚴然たり

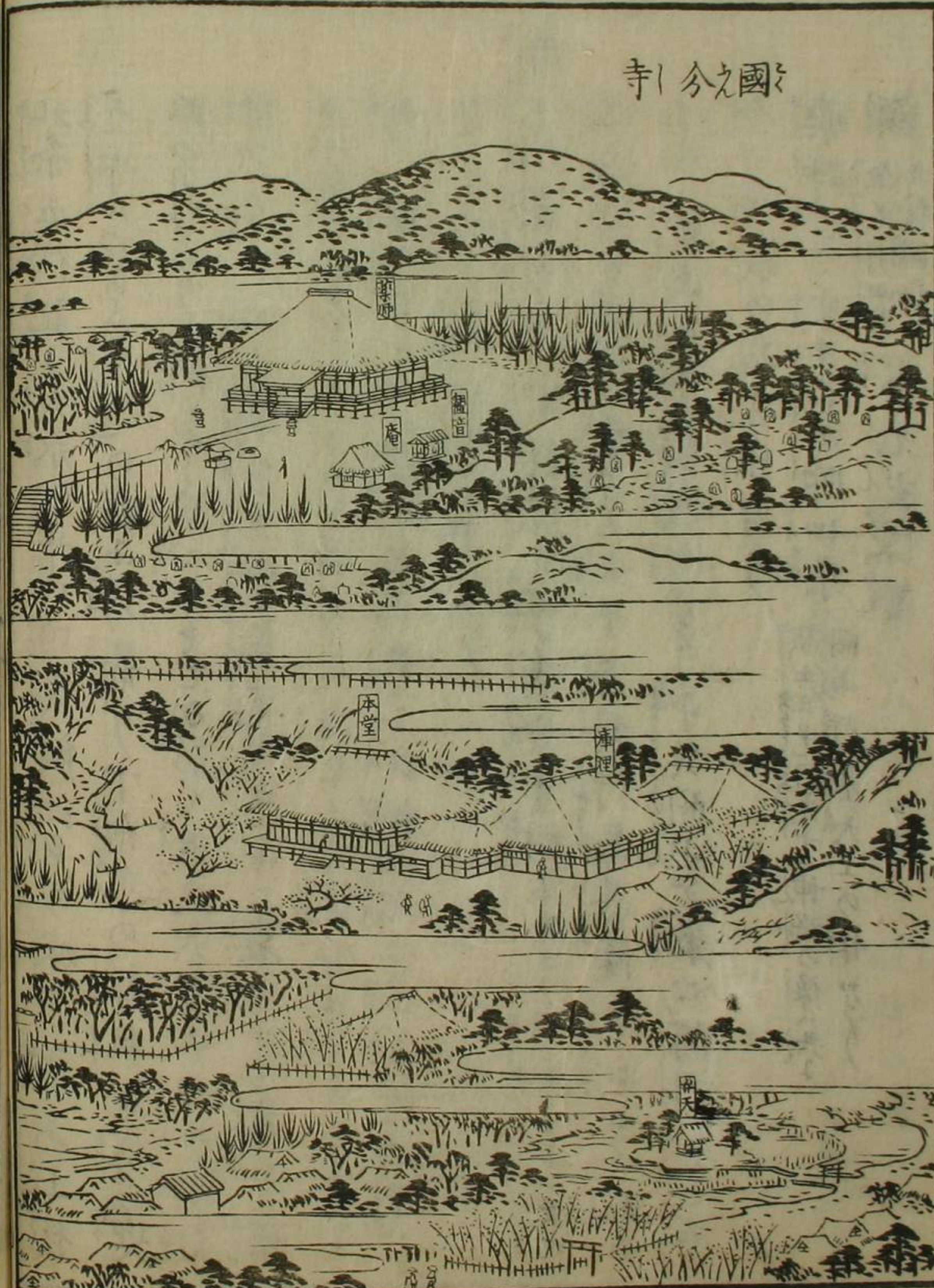
北條五代記ハ大永四年の頃氏綱江戸の城を齏ふ上杉
匠作ハつら河越の城ハ引籠り十余年の春秋を送り迎
ぬつらより例ありす心ちをわひて天文六年の卯月下旬
世を早く去り嫡男五郎朝定生年十三歳中へ家を継
あひぬてわれハ七マテ日の服忌え経をく道をあしとあ兵を
起し深大寺とい古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企あり
かりとあるハ則此所ののなり

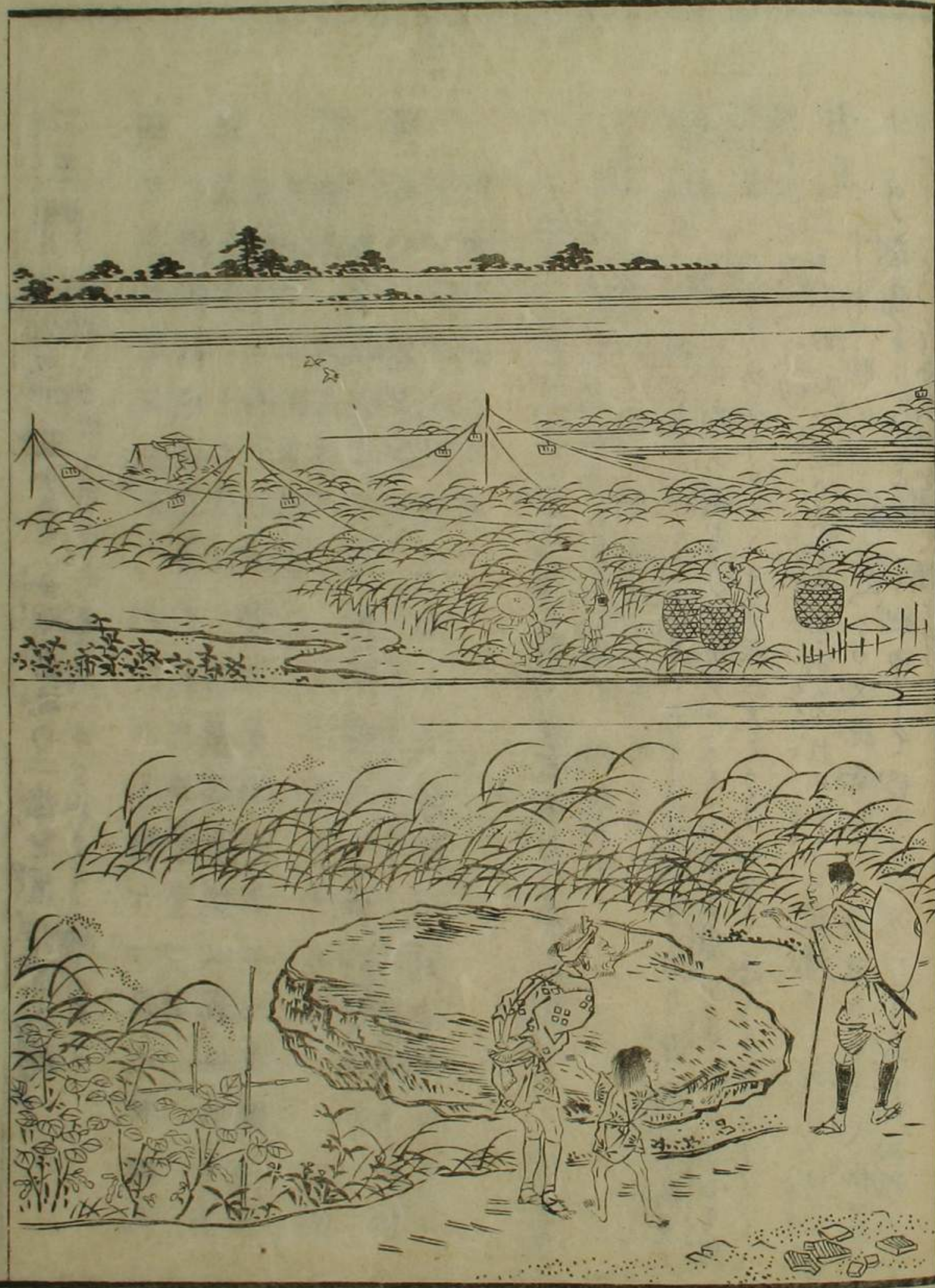
醫王山國分寺 寂勝院と号國分寺村ハあり府中あり北の
於十八町を隔り當寺ハ天平年間行基菩薩草創せり
しと聖武天王の勅願所なり中興開山とて教心阿闍梨と号

今ハ新義の真言宗なり
薬師堂 本多薬師如来 照土日光十三神將の像ハ
額 塗光明四天 深見玄岱筆 開山行基大士の作なり



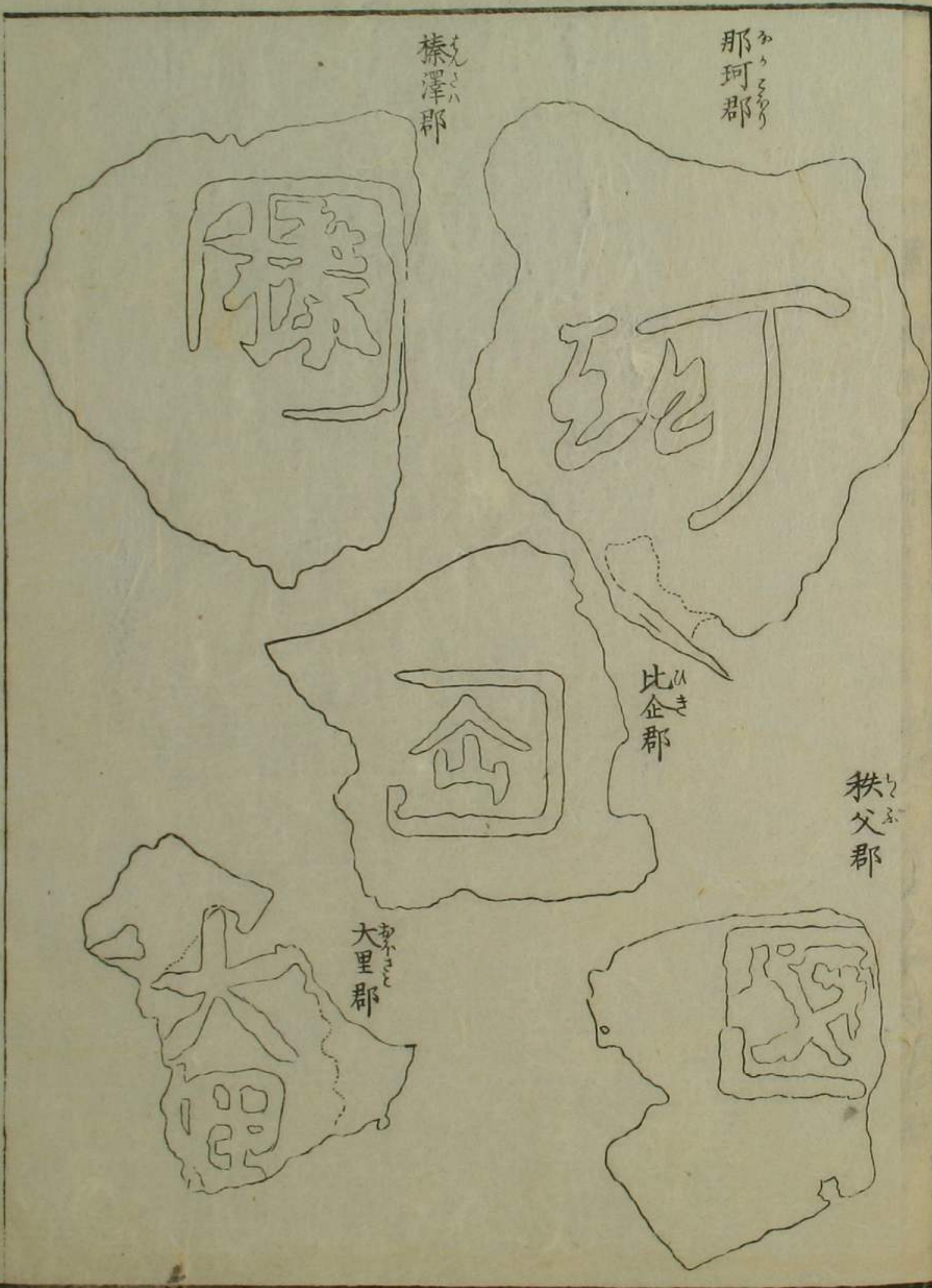
寺ノ國





國分寺
伽藍旧跡





二王門

石階の中腹あり金剛密迹の二像を置作者未詳
堂椽ハ古のまありと奮地ハ半丁あり南あり

續日本紀聖武紀曰金光明寺法華寺下各四万
下諸國別令造卷曰武藏國正公廨各四万
喜式弟二料五万東藥師寺料四万二千東梵釋四
東國分十料七千五百東云十一月二十七日
鑑曰建久五年修復破之旨被仰下綸旨於國
一宮并國分寺可修五破之旨被仰下綸旨於國
書曰寬喜三年王經之由被仰下開東御分國々
分行然奉行之云云
同東延續

たのまに世をばもてて空ありてを分て寺の教
称名院

二王門跡

寺前半町ありを隔て南の方の
畑の中ハ礎石を存せり

層塔跡

國分寺の北東南半丁ありを隔てあり草樹繁茂
の中真を収るありと中み徑三尺あり石中置る空穴あり

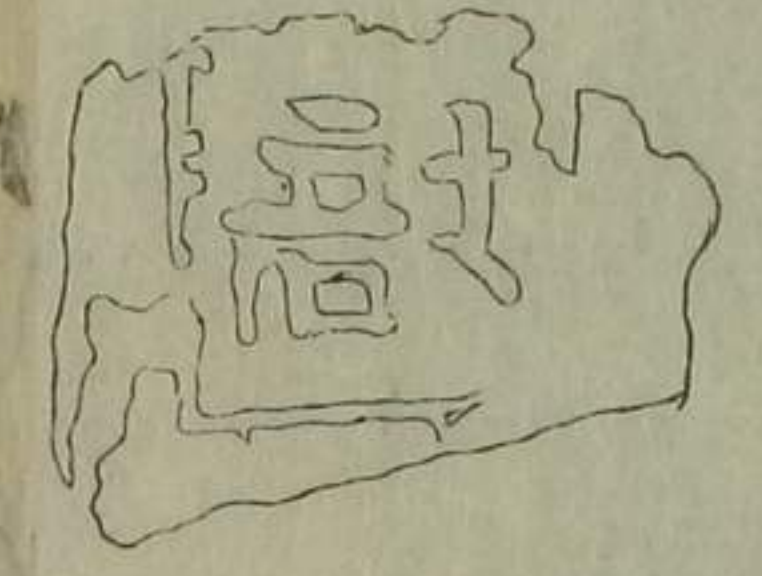
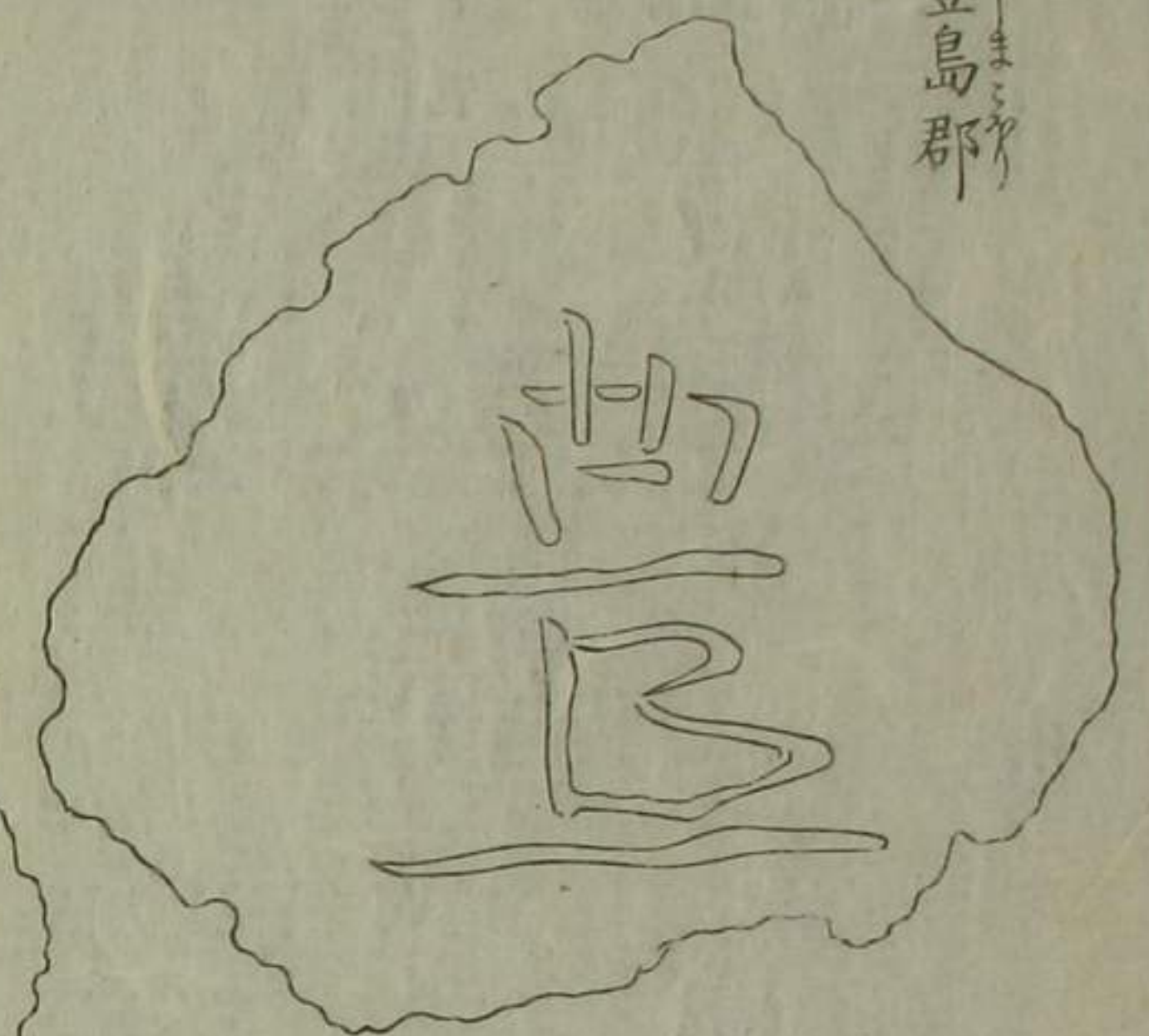
古瓦

二王門跡の辺り教百歩あり往の古瓦の破碎せしものあり皆堅密
の形全くと文殊奇中と國分寺の古大伽藍

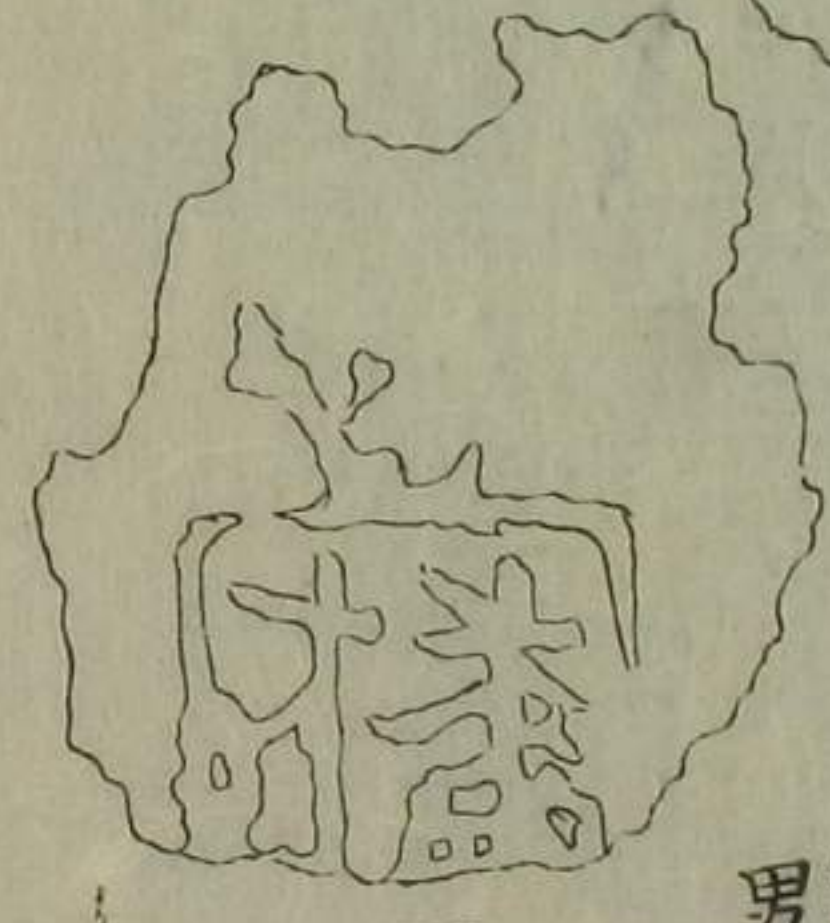
印せしものその形を辨て證とす

豊島郡

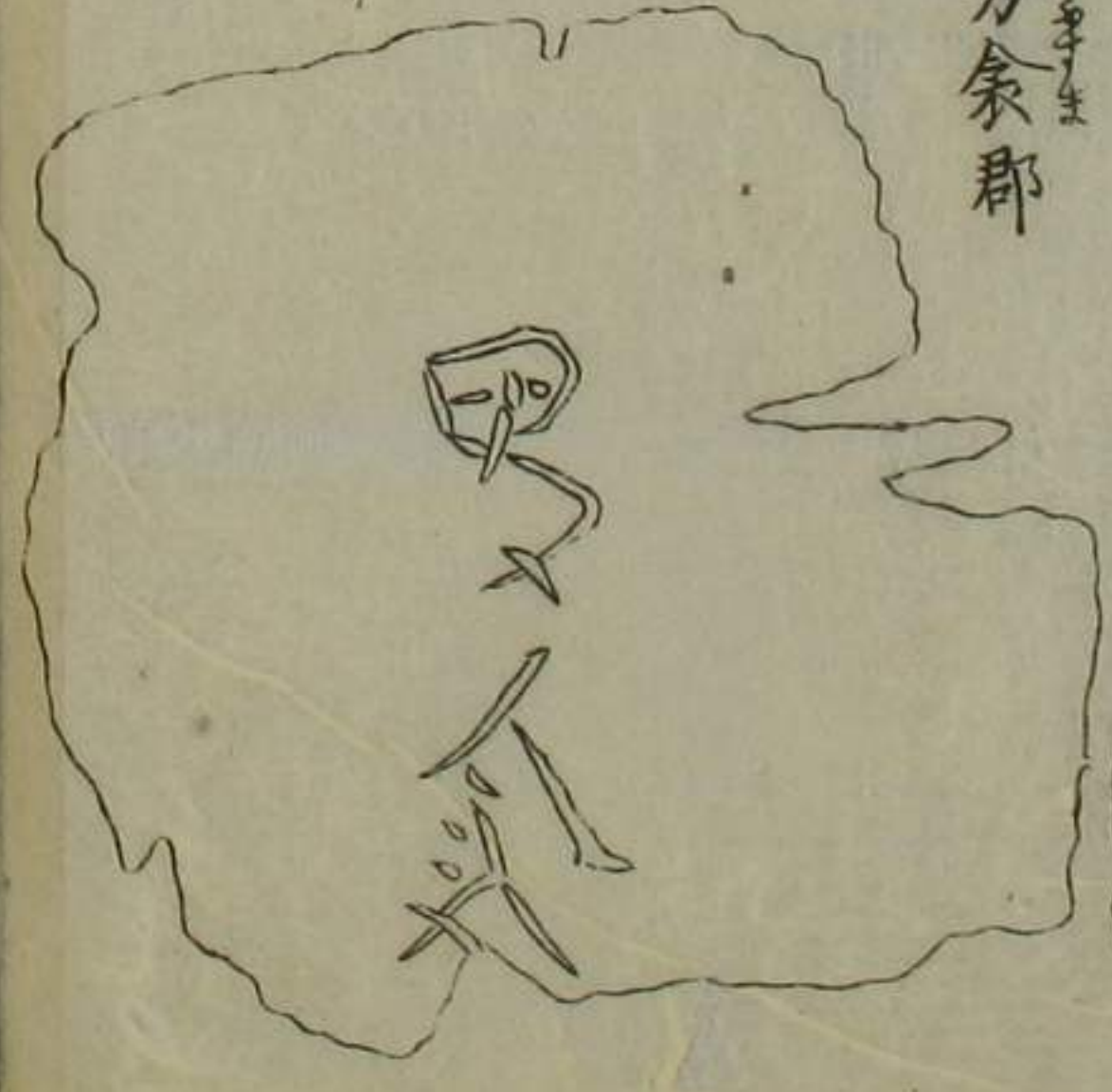
埼玉郡



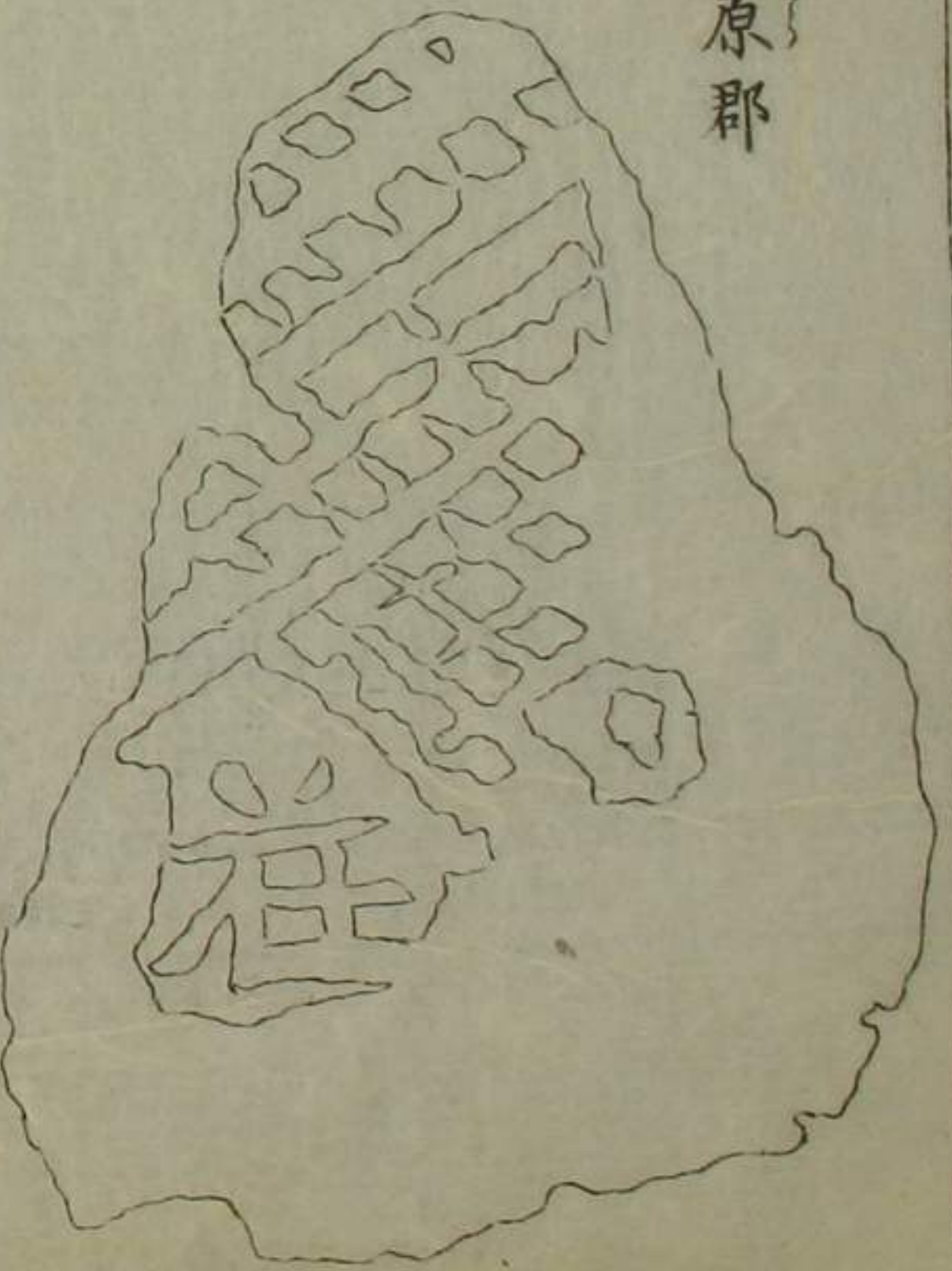
播磨郡



男余郡



荏原郡



國分寺碑

藥師堂の前方より碑文ハ服元雄中英先生撰む

當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣與州征伐發向の頃

當時へ入るひ頃ハ盛大の寺院なり云々この星霜を

経る元弘の兵火よ亡びて新田家少く再興あり兵革の

世終ふ古よ復さるる然る宝暦年間権大僧都法印

賢盛衆縁を募り新に醫王閣を宮建し傳ふる所の霊像を

安んず靈跡を表す今古伽藍の礎石の巖然として田間

阡陌の間埋もる懐旧の情を催せり此寺前畑の中かつての塚

あり或人云かつての食場ハ頭掛場ありと依る按よ古合戦の

處敵方の首級を擲し地をばハそ傍に食場を住居しありん歟

富士見塚 國分寺より西の方五町半を隔つ此所小登れハ一瞬千

里殊よ奇觀たり東ハ浩茫と々々限るあく天涯つら小地

接もつと見ると中秋の夕月のあつきわ草より出く草小入の

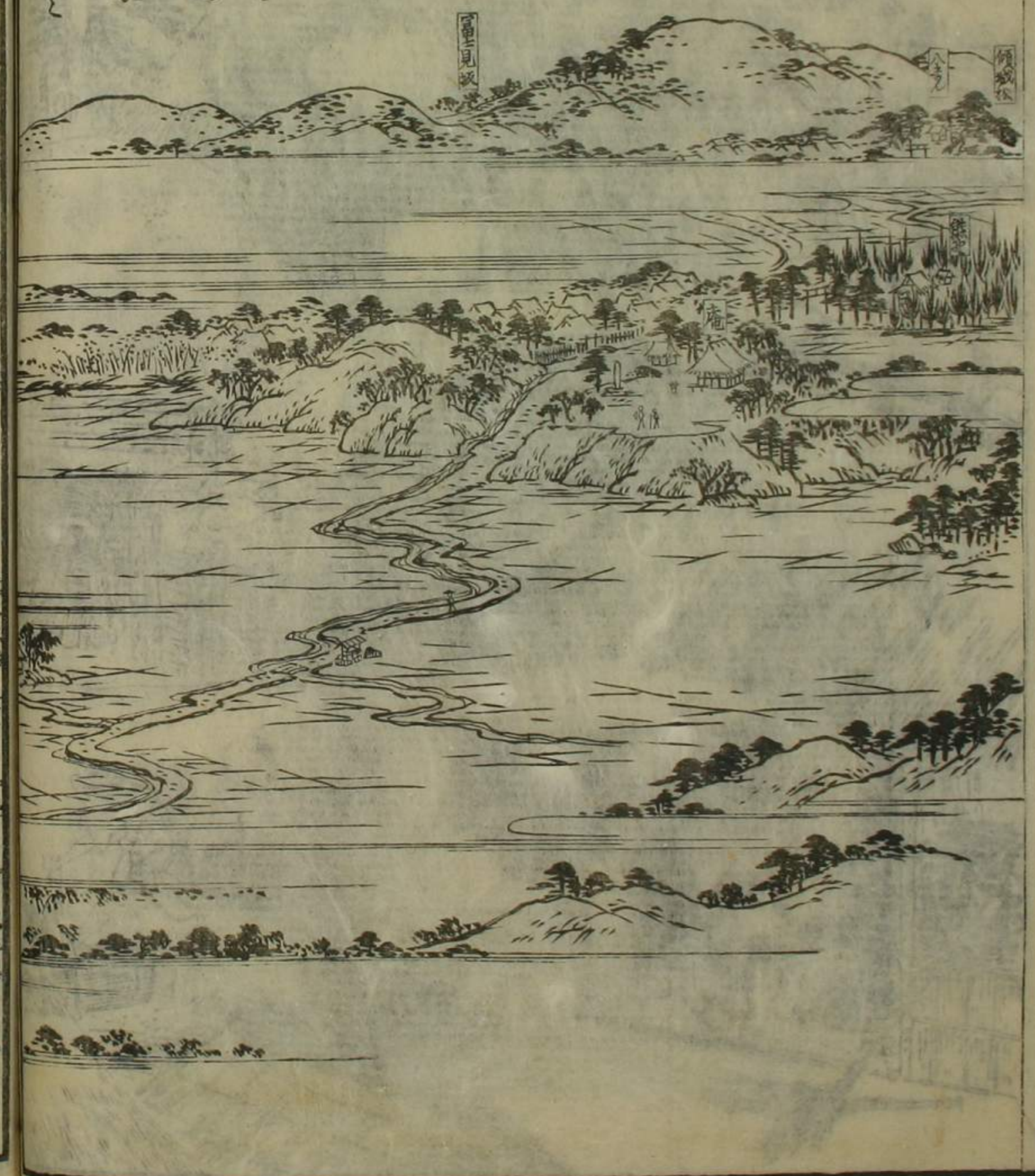
古詠よ古を想像る感情少くす此故よ幽人騷客こふ来



意々窟
阿弥陀堂
傾城松
牛頭天王

回國雜記

朽木
名



残れり

今

今

笑

あ

道真准后



遊賞せり 五十歩ありたりあり

阿弥陀坂 富士見塚より十三町ありを隔て意う窪村の地北へ

向ひく下坂を云此坂の左に傍る岡小草庵あり土人阿弥

陀堂と称す木像の阿弥陀如来を奉る也 延享四年鶴心と云僧此草庵の廢るを興す

土人云古の昔ハ銅像中々今府中六所宮の社地あるとの

是なりとお傳ふ往古畠山庄司次郎重忠此地意う窪の驛舎ハ

中々一頃寵愛せし遊君ありし重忠平家追討つとて西國へ

出陣せし然る後をこのものありて重忠討死しし由の月

よりまがしりしを實としかの遊君歎このあり終小自殺し

たりしを後重忠はくあそれと彼遊君う節操を感し菩提の

為し此阿弥陀堂建立し鏡を以て弥陀如来の像を鑄て安置

せしと云 酒云此地小道場畑と字まじり地あり土人云むく此地は無量山阿弥陀堂も境内ありし寺院ありし今府中六所宮の社地ハ

阿弥陀堂の鏡像の阿弥陀佛ハ重忠愛せし遊君の菩提の爲に造立せしなり此佛ハ

戀う窪 同所坂より下の低き地をり古へ東奥北越ハの國より

京師及び鎌倉ホへ至るの驛路あり平頂ハ遊女の家居なり

ありてつとめたりしあり 此地ハ牛頭天王の叢祠あり竹林の中ハ四方の地ありて古への北國街道の

旧址ありと云り 田國雜記 恋う窪と云るあり

朽をぬるものも恋う窪今をことわたりしあり 道與 崔后

傾城々松 同所良の方八幡宮の社地あり同程の古松二株

雙立せり土人重忠う愛せし遊君の塚印の松ありといひはみ

然れども社地なるもの此八幡宮の神樹あり

武蔵野 南ハ多磨川北ハ荒川東ハ隅田川西ハ大嶽秩父根を

限とて多磨橋樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間

等まじり十郡を跨る草より出て草入又草の枕は旅寝此

日敷を忘れ向へし里の遙なり杯代々の歌人袂をあらりし

御入國の項より昔引之十萬戸の炊煙紫霞と暮ふ棚引
 僅よそ川跡の残るも兼應より享保に至り四度追新田
 開發ありて耕田林園とあり往古の風光これありとされと月夜
 狭山お登りて四隣を顧望もるるに曠野蒼茫千里無限
 往古の状を想像もるるにたより
 狭山八弟四巻
 の中に入しり

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良故可多也伎麻左氏爾毛乃良奴伎
 美我名宇良爾低爾家里
 武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與
 比欲利世呂爾安波奈布與
 古非思家波素氏毛布良武乎牟射志野乃宇家良
 我波奈乃伊呂爾豆奈由米
 伊可爾思氏古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我

波奈乃伊呂爾低受安良牟
 武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻
 爾末爾吾者余利爾思乎
 和我世故乎安村可母伊波武牟射志野乃宇家良
 我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今
 初集をなすひとの御歌をなすのありしむる月を
 攝政 大政大臣

續古今
 むと一は月の入るきゆをなす屋をなすありしむる月を
 通方

玉葉
 旅人の初るるにふきまけくをなすありしむる月を
 右大臣

續千載
 むと一は月の入るきゆをなす屋をなすありしむる月を
 右大臣

續後拾遺
 さあもまてくまふハ御歌むと一は月をなすありしむる月を
 家隆

新續古今
 むと一は月の入るきゆをなす屋をなすありしむる月を
 定家

十五番奇合
 むと一は月の入るきゆをなす屋をなすありしむる月を
 雅経

夫木 花のまゝ花をよし 妻やこれのん 一も兼のむさし の末 為實
田國雜記 むさし 花の 殘船をあらめく

ひまき 一も 明のこ 海 初る 野、り 耶 道典 准后

桂林集 むさし 兼 長陣 せし 時 ちきき びを けり 直朝

武蔵野記行 武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

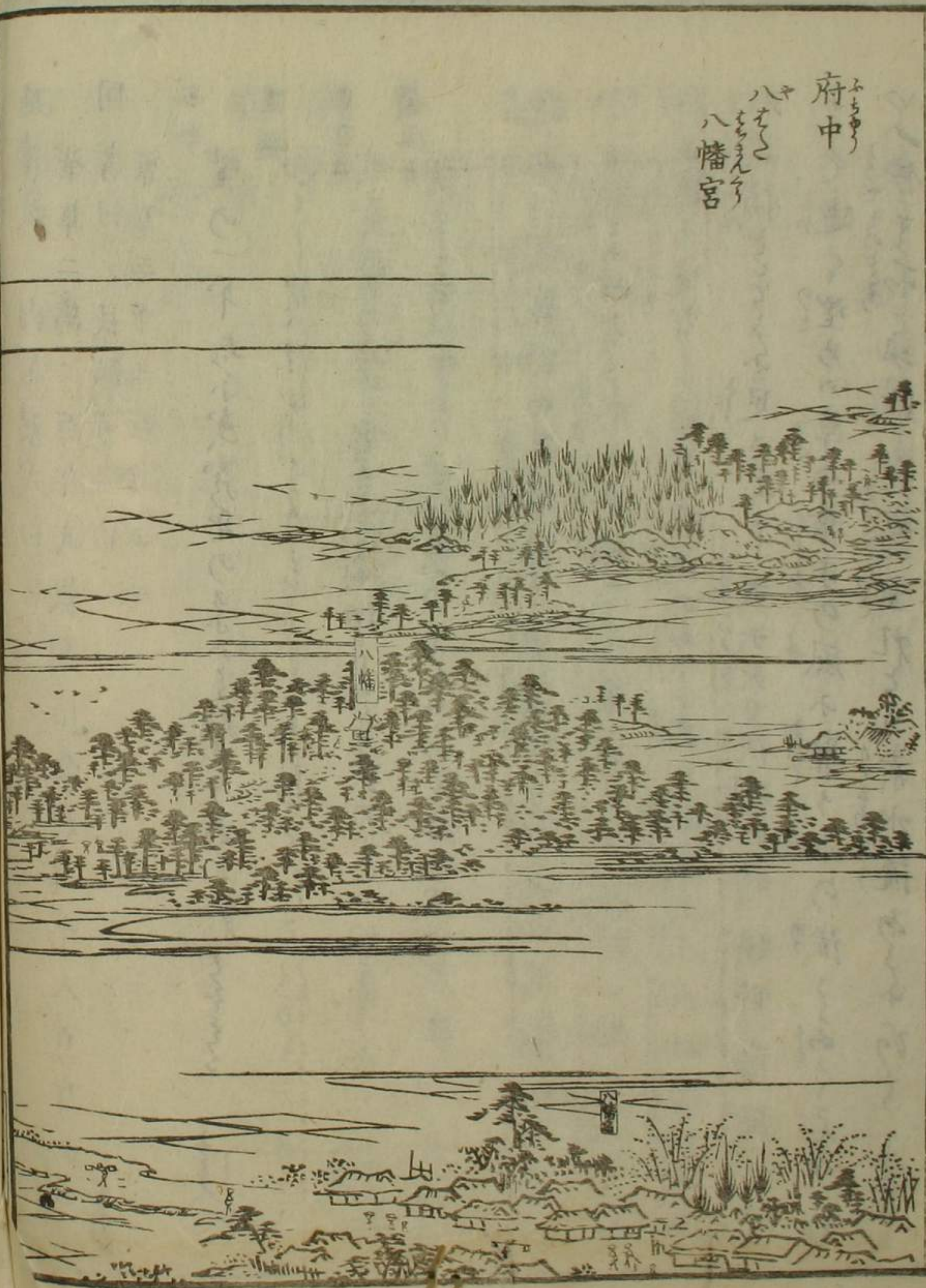
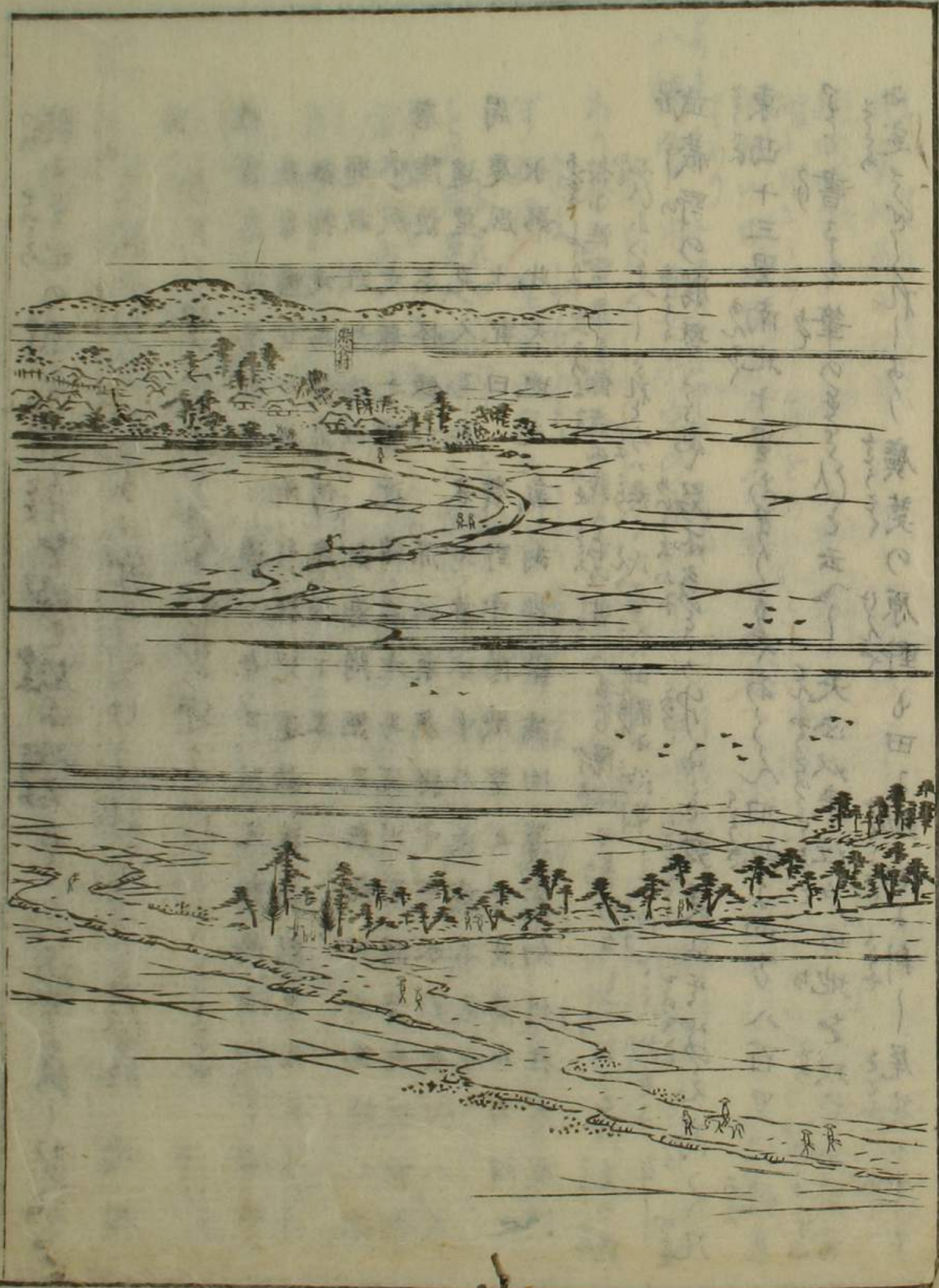
武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家

武蔵野の 古 奇ハ 萬葉集を ちり あり 代々の 撰集を 餘 奇合を 入 家



府中
八幡宮

終つひ小こ水みづの原はらに至いたるを放はなす此こゝ名なありといふをよきかたき

夫つま木き 在あるありといふの迹あとをたけしめてをよきかたき 俊頼

同 おと い は な の ま か た れ は な の 迹 を た け し め て を よ き か た き

性せい 靈れい 集しゅう 詠えい 陽やう 詠えい 喻う 運うん 無む 飛ひ 舉しよ 體たい 空くう 々々 無む 所しよ 有いう 狂きやう 兒に 迷ま 渴かつ 遂すい 忘わう 歸き 遠えん 而に 似に 水みづ 近ちか

唐たう 陸りく 望ぼう 志し 怪かい 録りく 曰い 轉てん 近ちか 轉てん 滅めつ 走しゆ 馬ば 流りう 見けん 熱ねつ 氣き 如に 野や 馬ば 謂い 之を 爲な

周しゆ 處ち 風ふう 土ど 記き 曰い 往わう 來らい 如に 深しん 州しゆ 東とう 鹿りく 縣けん 中ちゆう 有いう 水みづ 影えい 長ちやう 七しち 八はち 尺じやく

水みづ 影えい 此こゝ 天てん 地ち 之を 氣き 割わり 野や 中ちゆう 陽やう 望ぼう 乃すなは 至いた 前ぜん 不ふ 見けん 水みづ 長ちやう 七しち 八はち 尺じやく

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

東西とうし 十三里じさんり 南北なんぼく 十里じゆり ありといふ 旧きう 記き 二に 四方しつぱう 八百里はちぱうり に餘あま 々々

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

武蔵野むさしの の勝かつ 槩がい 々々 名な 不ふ 多た 々々 中ちゆう 小せう 珠しゆ 更せい 々々 高かう 々々 凡ぼん

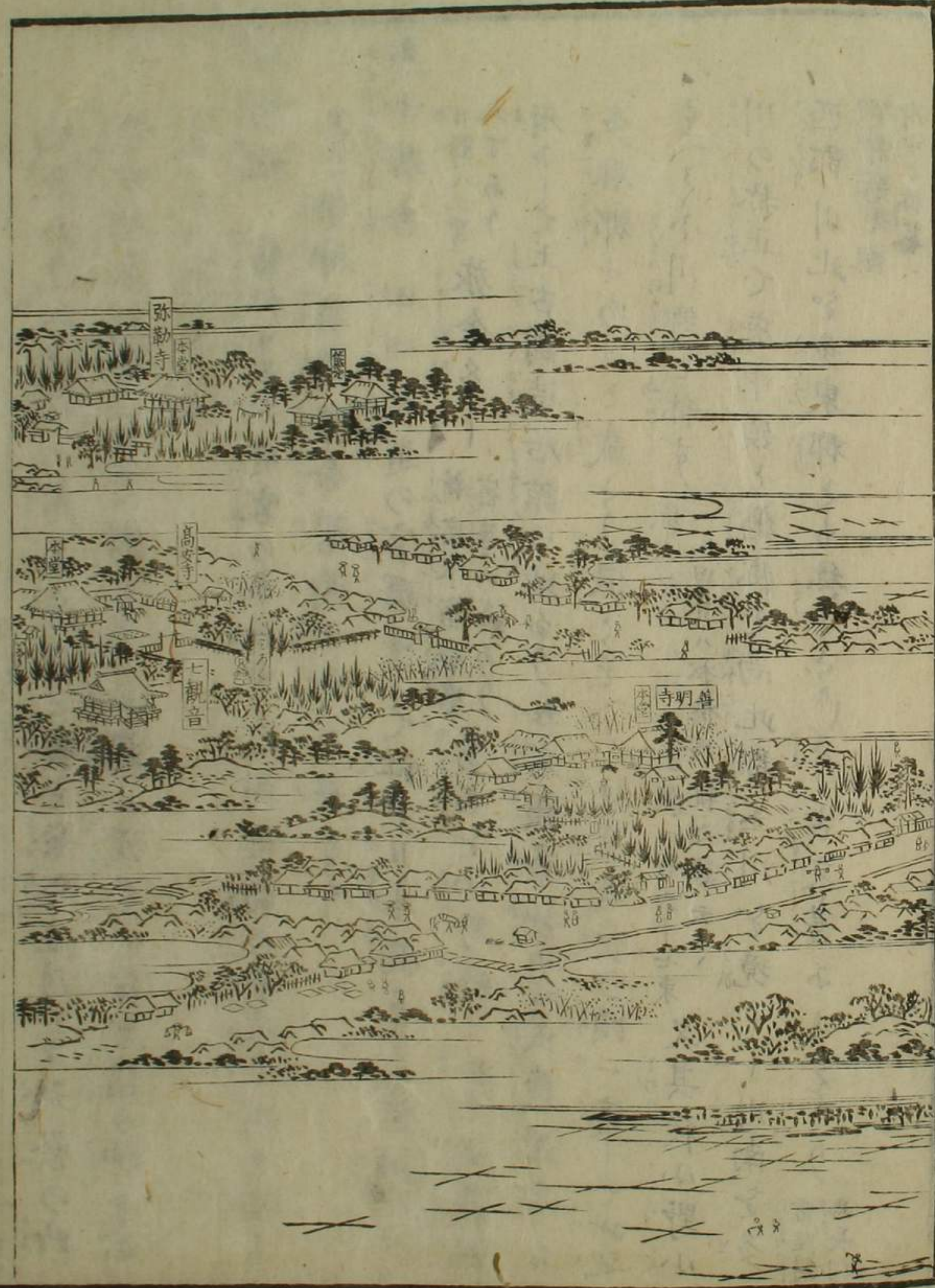
八幡宮

府中六所宮の末社すえの 甲州街道八幡宿の道より左ひだり あり祭まつり 應神天皇おうじんてんかう 六所宮の神主かみ 猿渡氏さるわたりし 兼かみ 帯おび 奉ほう 祀まつり す相傳あひたつた 聖武天皇せいぶてんかう の御宇ごう 日域にちいき の國くに 々々 勸かむ 精せい 一いつ 宮みや 宮みや 々々 如ごと のの皆是これ 八幡村はつぱんむら の八幡宮はつぱんみや との多おほ 々々 總社そうしや 神祠かみ の近ちか 々々 あり古ふる 本社ほんしや 禮殿らいでん 並なら 建た 々々 莊むら 嚴げん 蕩たう 々々 平ひら 後ご 々々 漸ぜん

衰おとろ 敵てき 々々 速すみ 々々 今いま 八即はつ 茅宮ちのみや 小社せうしや なり 甲か 年ねん あり 々々 又また 社境しやけい 圓えん 圓えん の中ちゆう 々々 權けん 正せい との 地名ちめい あり古ふる の宮守みやもり 居い 街まち の跡あと ありといふ

瀧たき の社しや 當社たうしや 六所宮ろくしよみや の末社すえの 甲州街道八幡宮かすうかいだうはつぱんみや あり 三町さんちゆう あり 東南とうなん の方かた あり 祭まつり 神倉かみくら 稻魂いなたま 大神おほい なり 社しや の傍かた 々々 少すく 々々 斗と の

瀧



府中
称名寺
善明寺
高安寺

飛泉あり六所宮の御手洗池と称せ毎年五月五日大祭の時
神幸供奉の葦ハ五月朔日より此龍よ浸りて身を清め神夏ふ
たつさつと云

石塚社 當社も又六所宮の末社也て同所南の方代小川の辺に
あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舎 甲州街道の官驛也て江戸日本橋より七里 布田より
一里廿七丁

日野へ二里 旅舎多し 新宿本宿番場 舊名を小野縣と称せ武蔵國
八丁あり 宿等の名あり

府中へ上古國造居館の地あり 和名類聚抄也武蔵國府也

多麻郡ありと載り徴とせへ延喜延長の頃一變して此辺

をへく小川郷と稱す 風土記曰小川郷公穀二百六十七束 又其後小野小

川の称止て府中領と總称を尚此郡玉川を境とて川南を多

西郡川北を多東郡とも稱しとて古文書ありとてり

越前越後皆 常陸對馬長門
府中と稱せり

